

立正大学古書資料館蔵
奈良絵本『大織冠』中巻
—影印と翻刻—

伊藤 善隆



シリーズ・アタラクシア vol. 5

立正大学古書資料館蔵
奈良絵本『大織冠』中巻
—影印と翻刻—

【目次】

冊子本『太しよくはん』中巻影印	1
巻子本『太しよくわん』中巻影印	73
立正大学古書資料館蔵『大織冠』冊子本（中巻）翻刻・注・校異	91

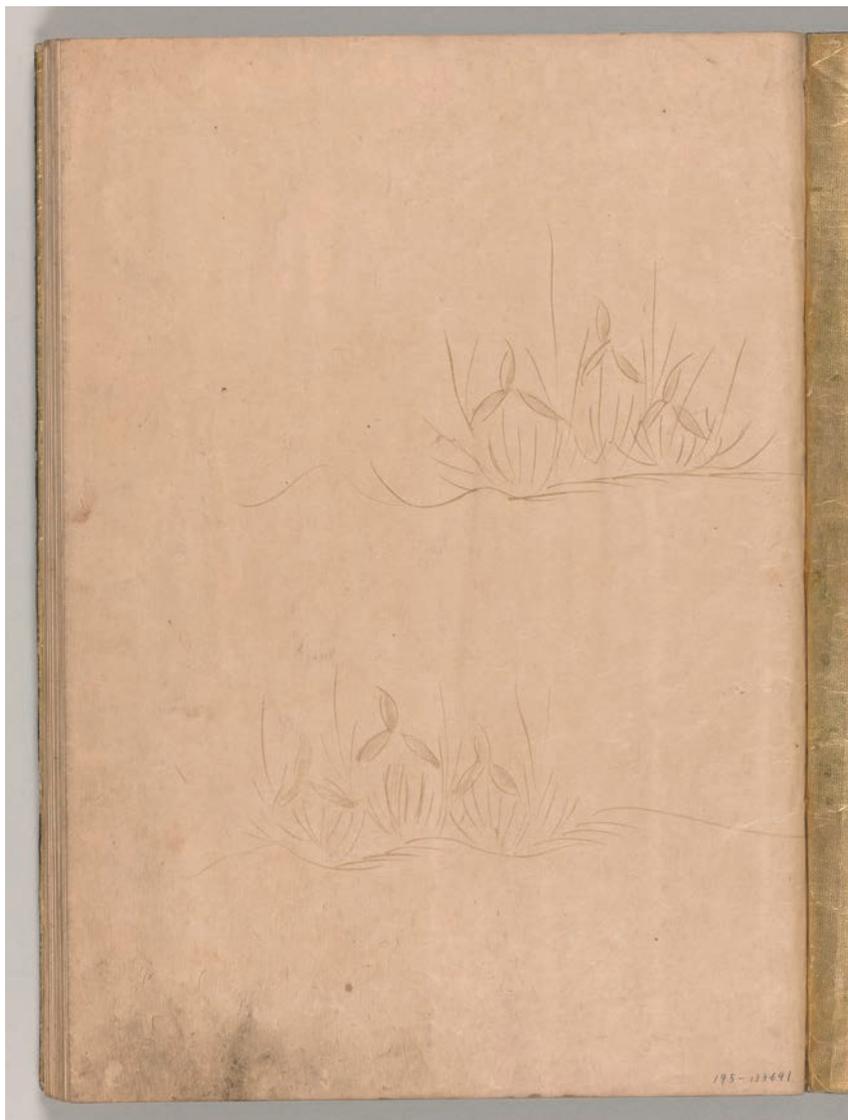
冊子本『太しよくはん』中巻影印



(中巻表紙)



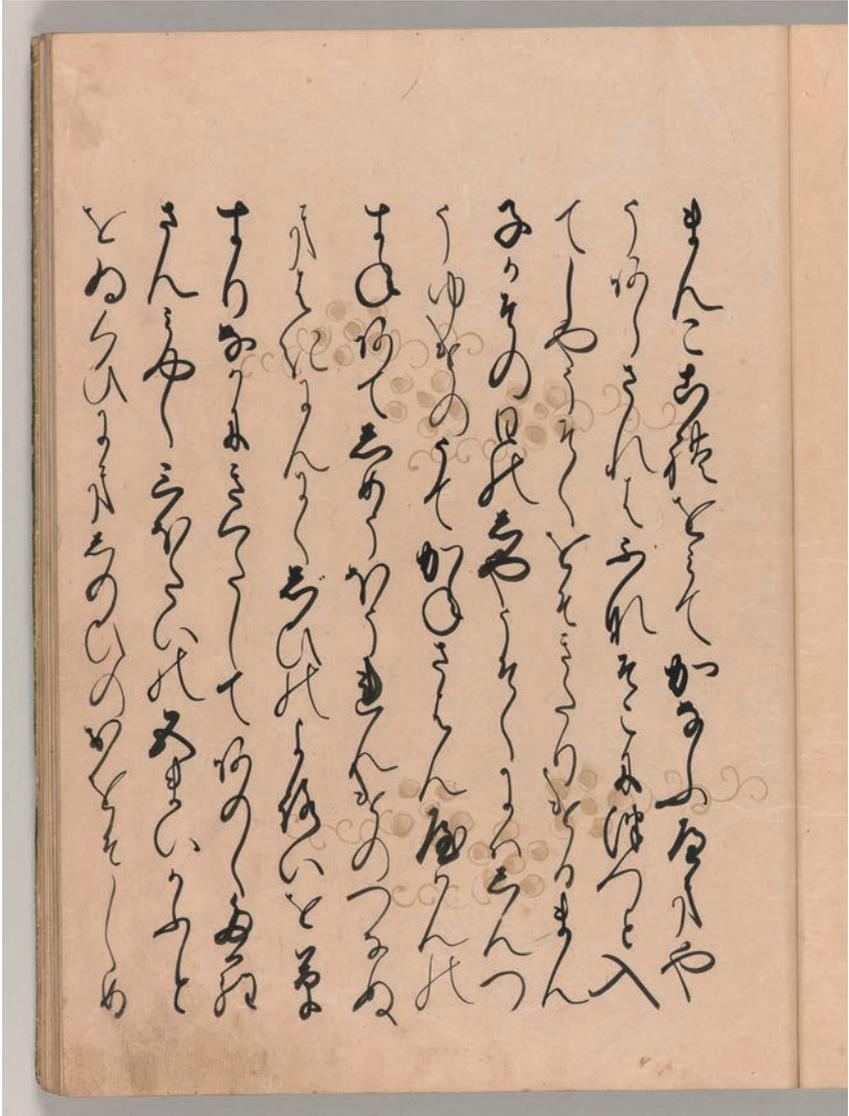
(中巻表紙見返し)



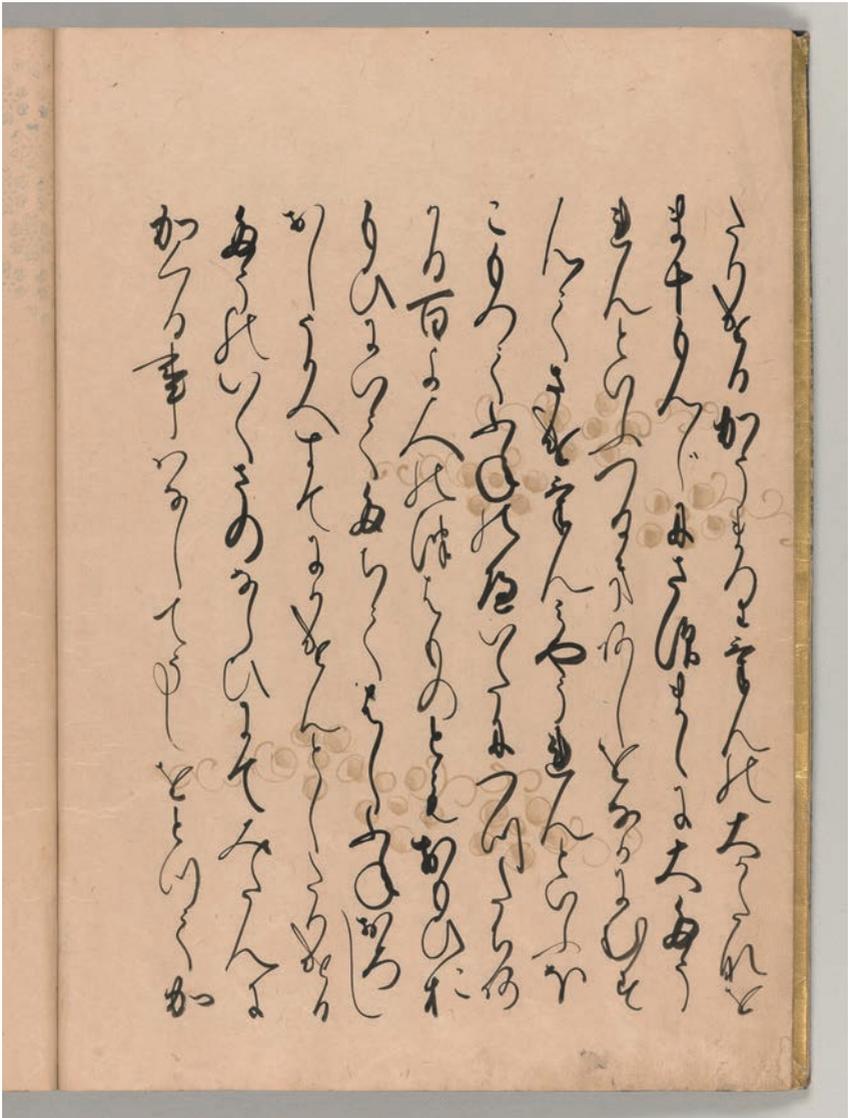
(遊紙才)



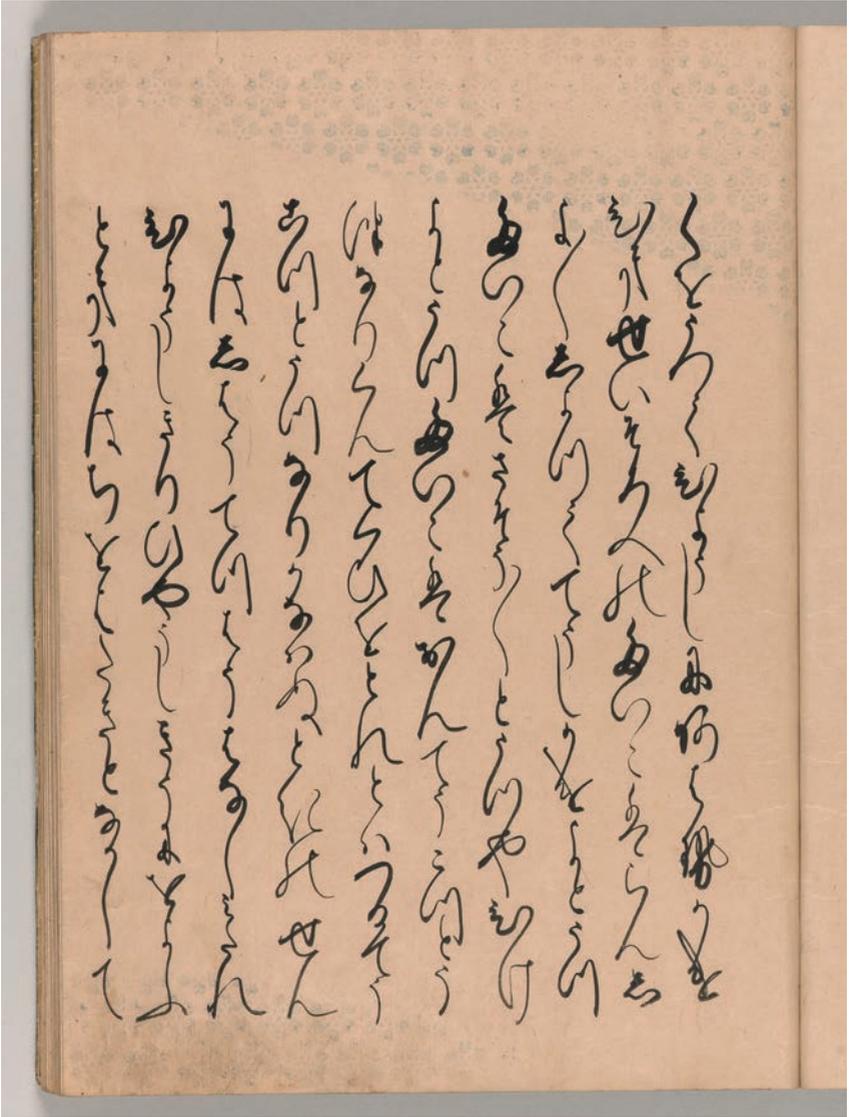
(遊紙ウ)



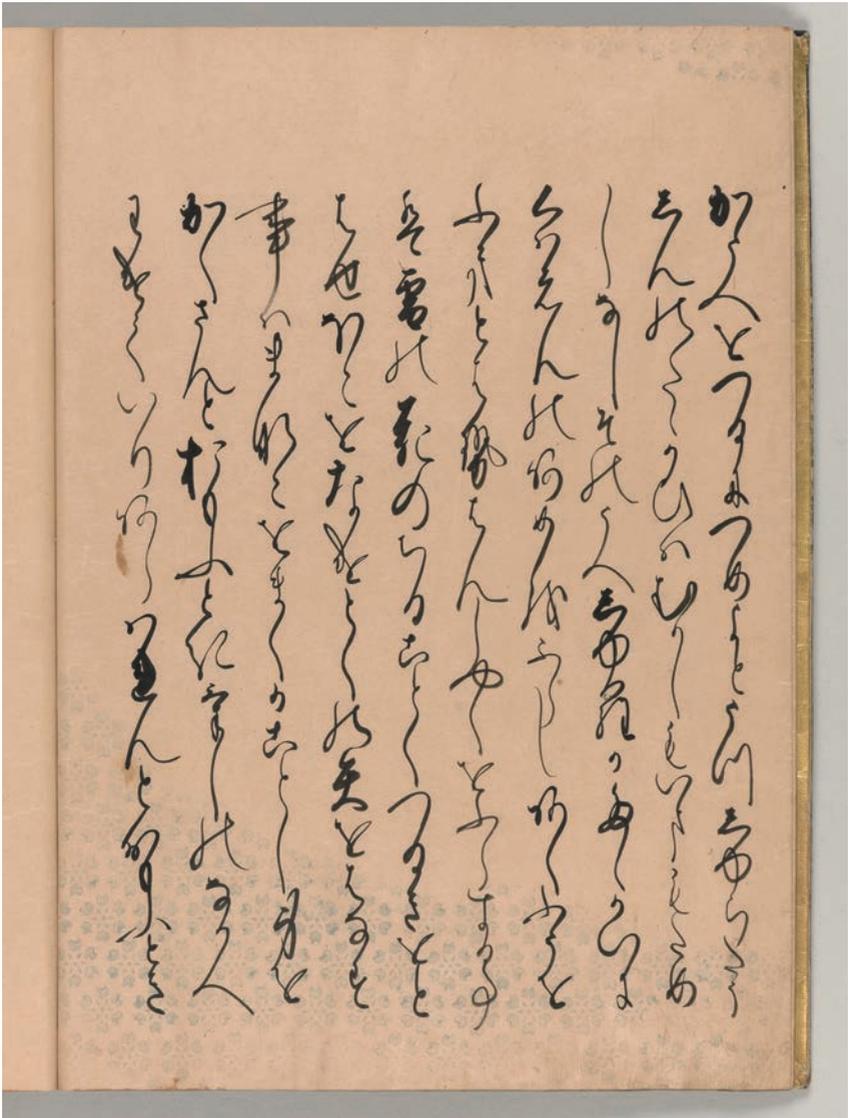
(一才)



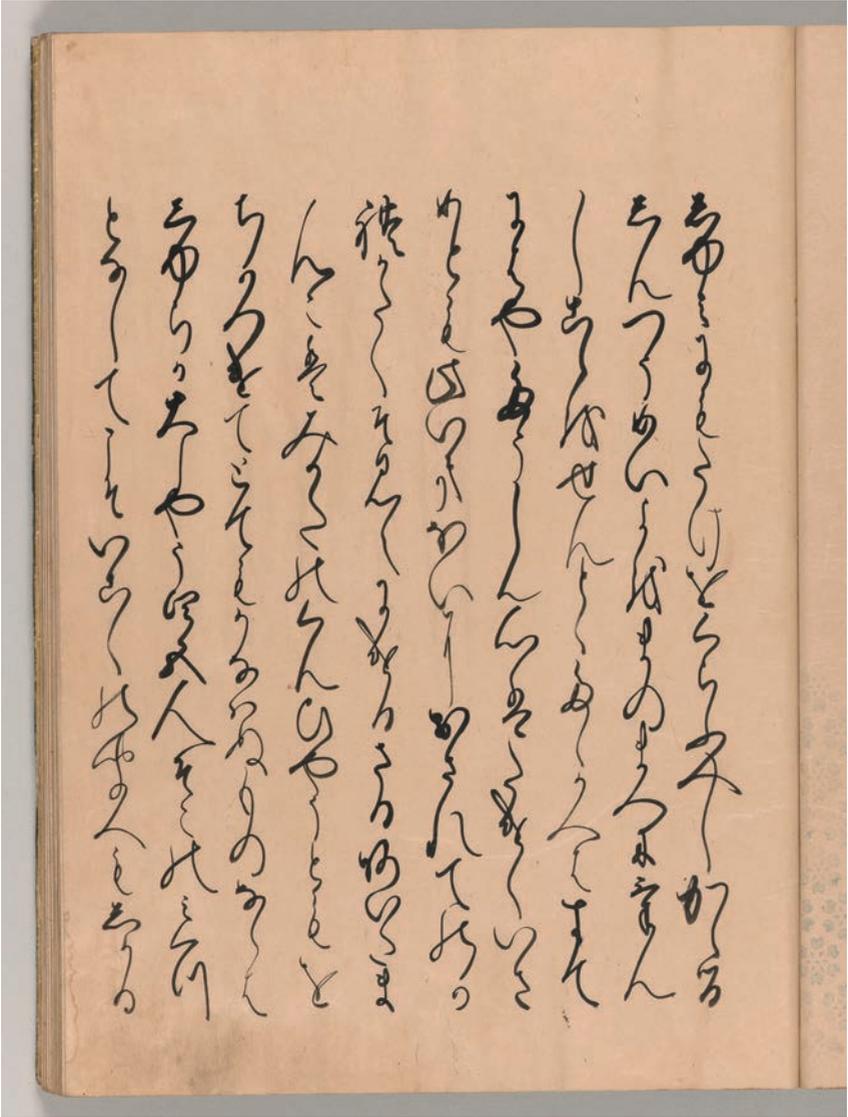
(一ウ)



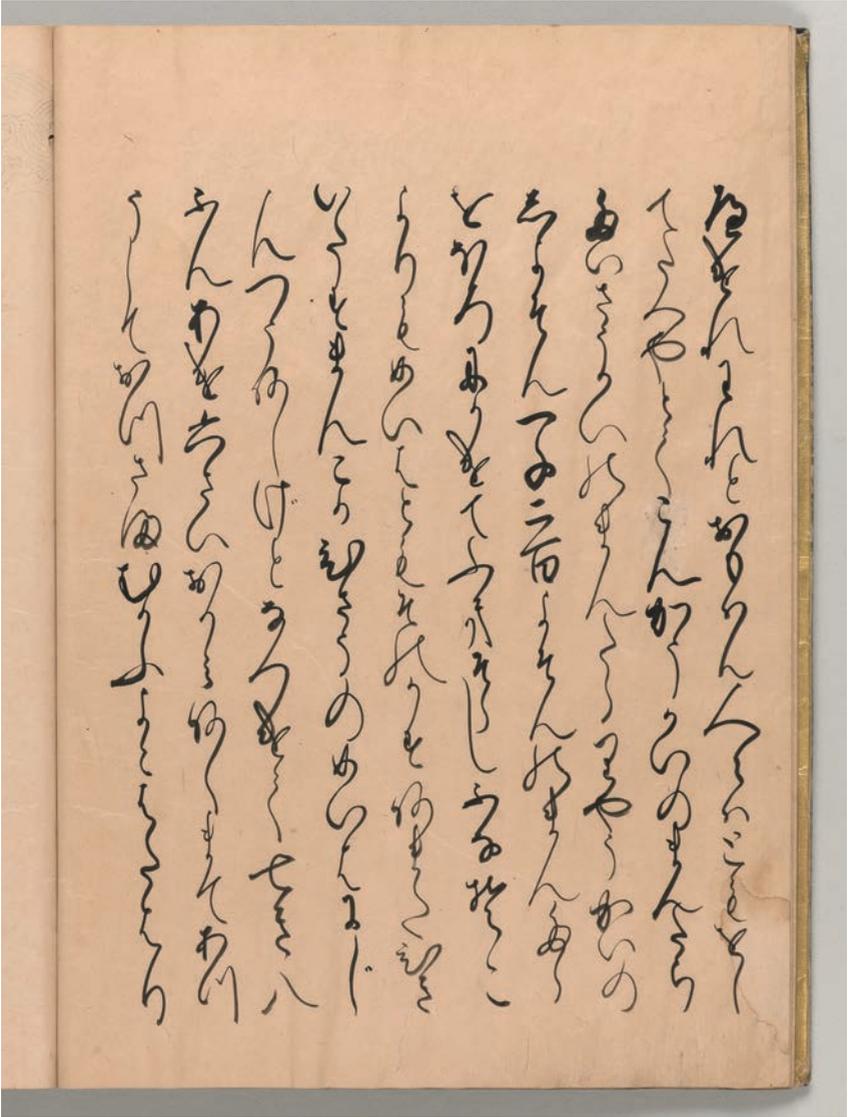
(二才)



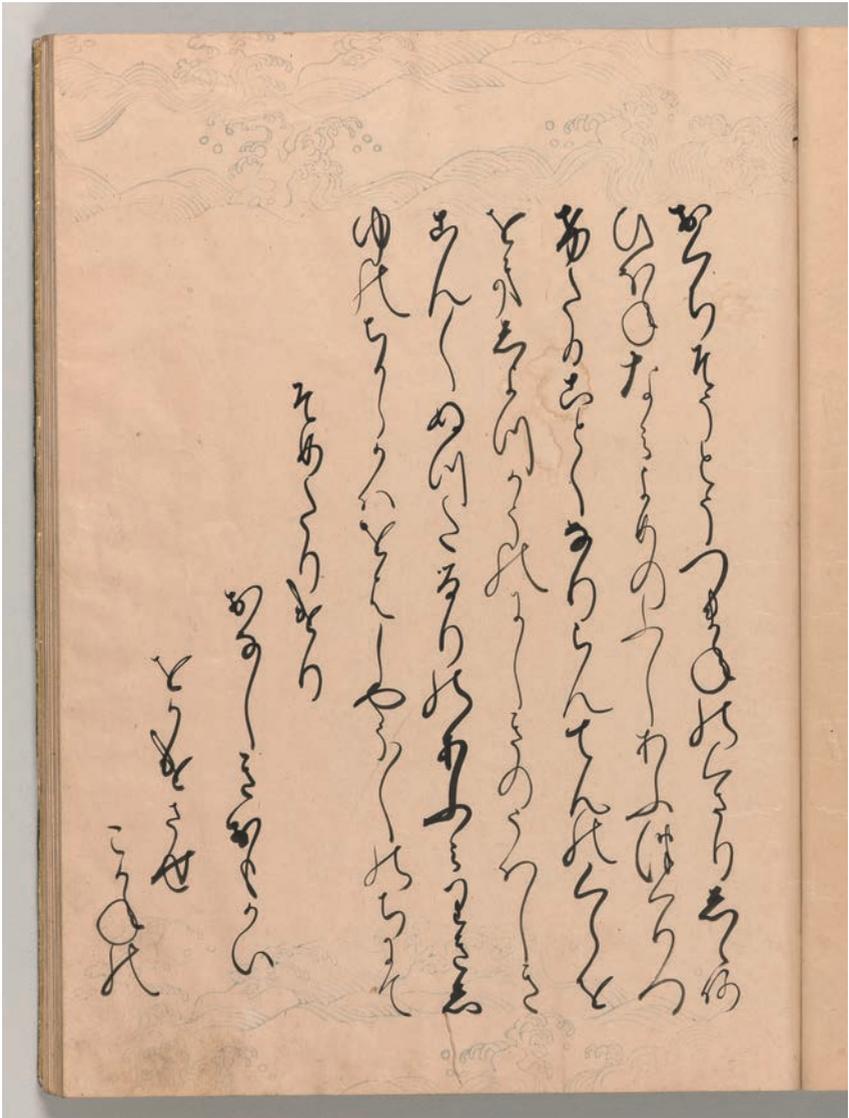
(二ウ)



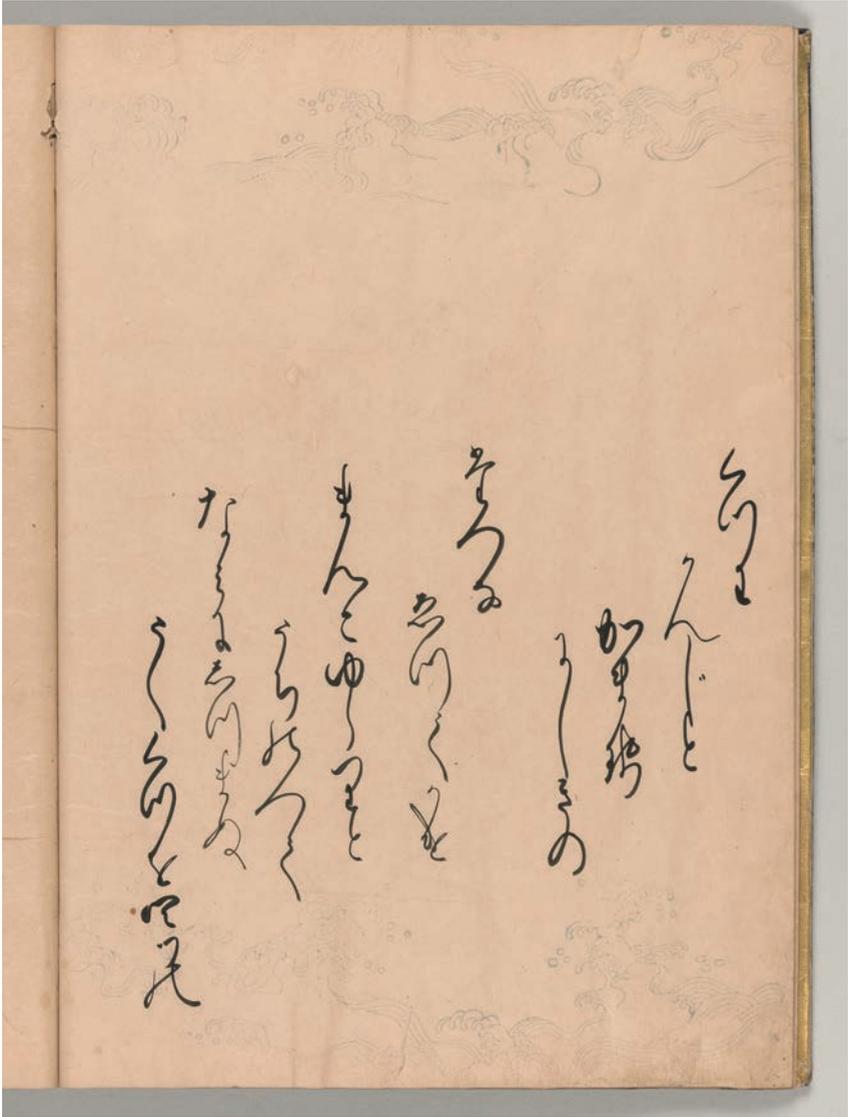
(三才)



(三ウ)



(四才)



(四ウ)



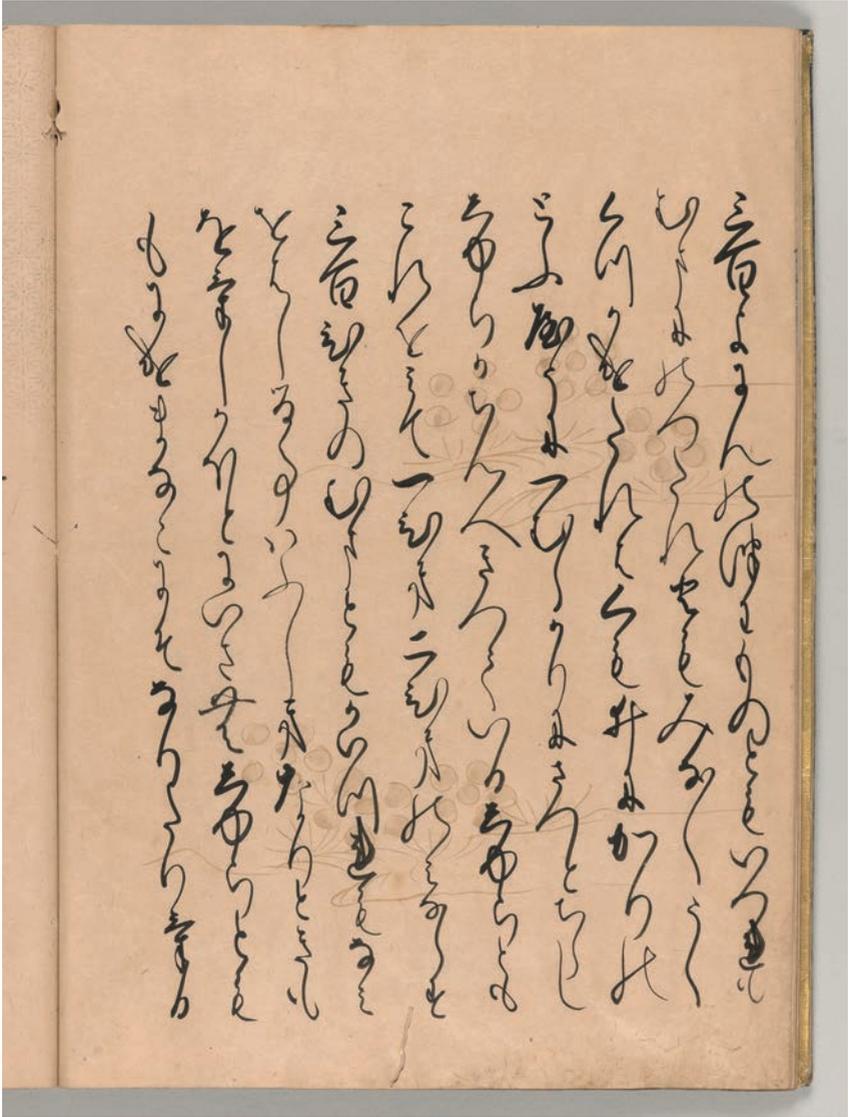
(五才)



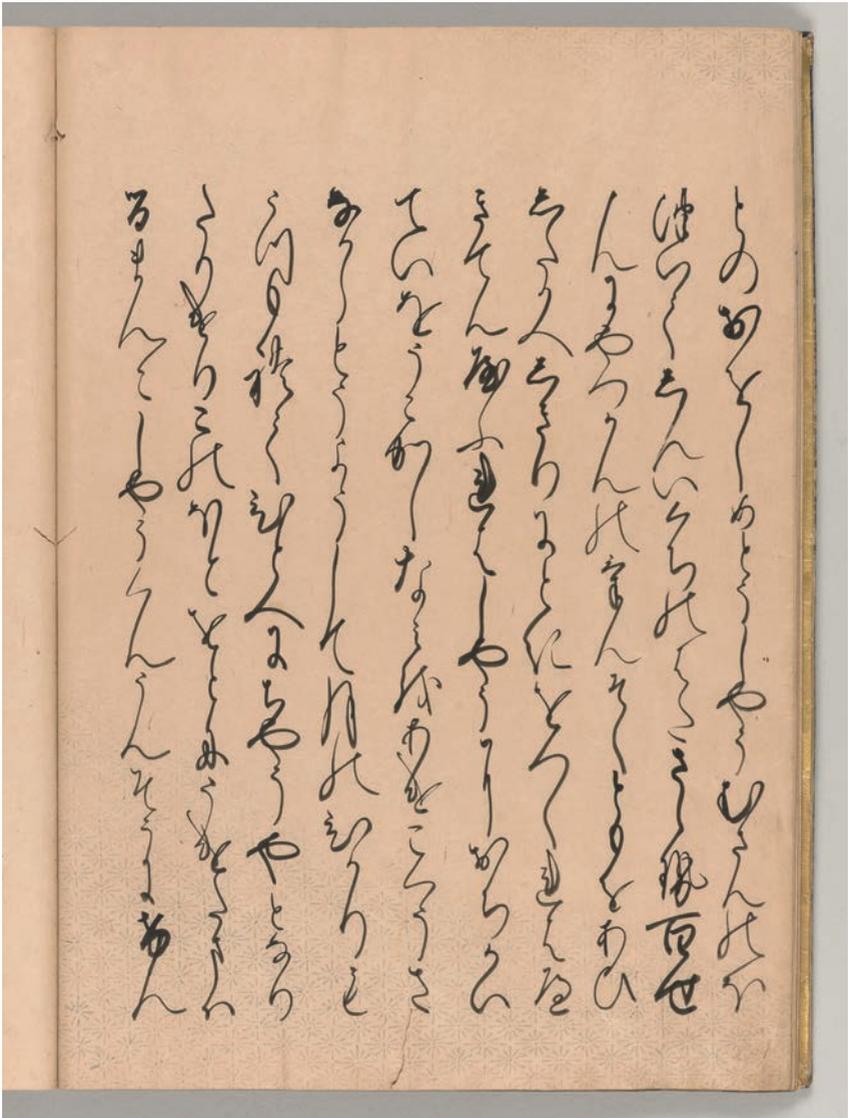
(五ウ)



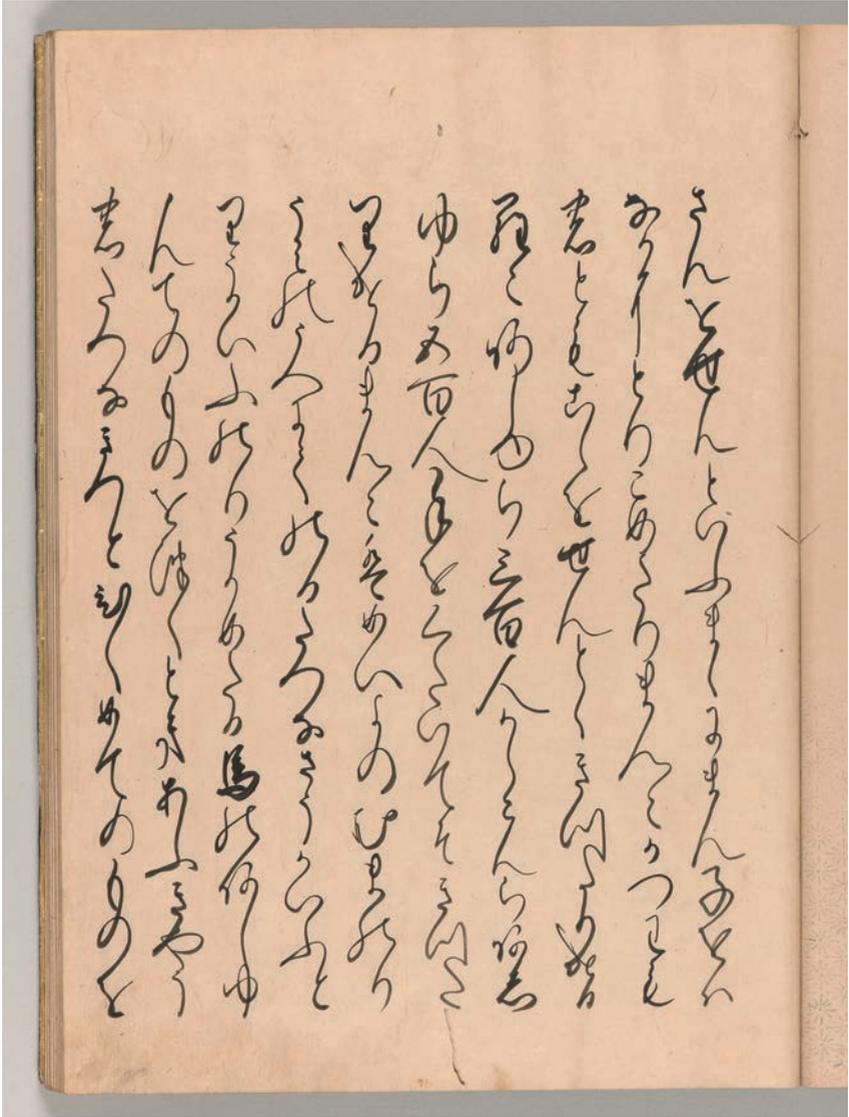
(六才)



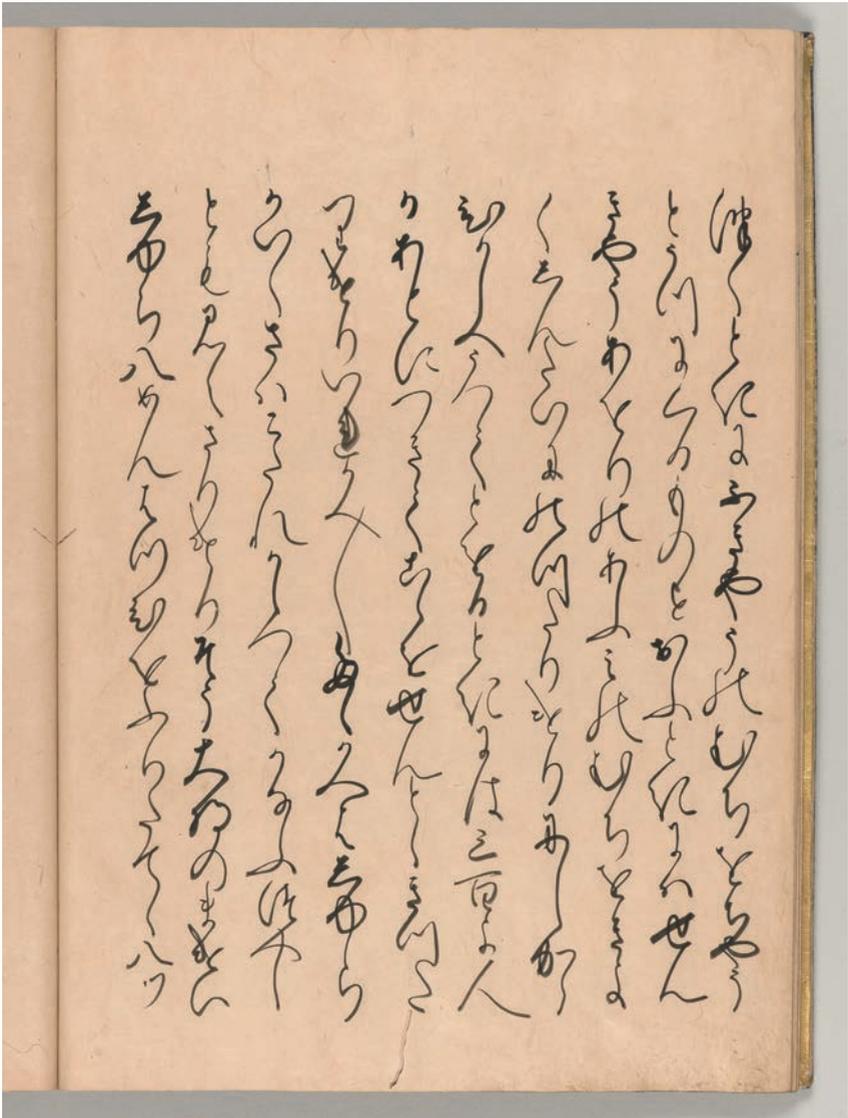
(六ウ)



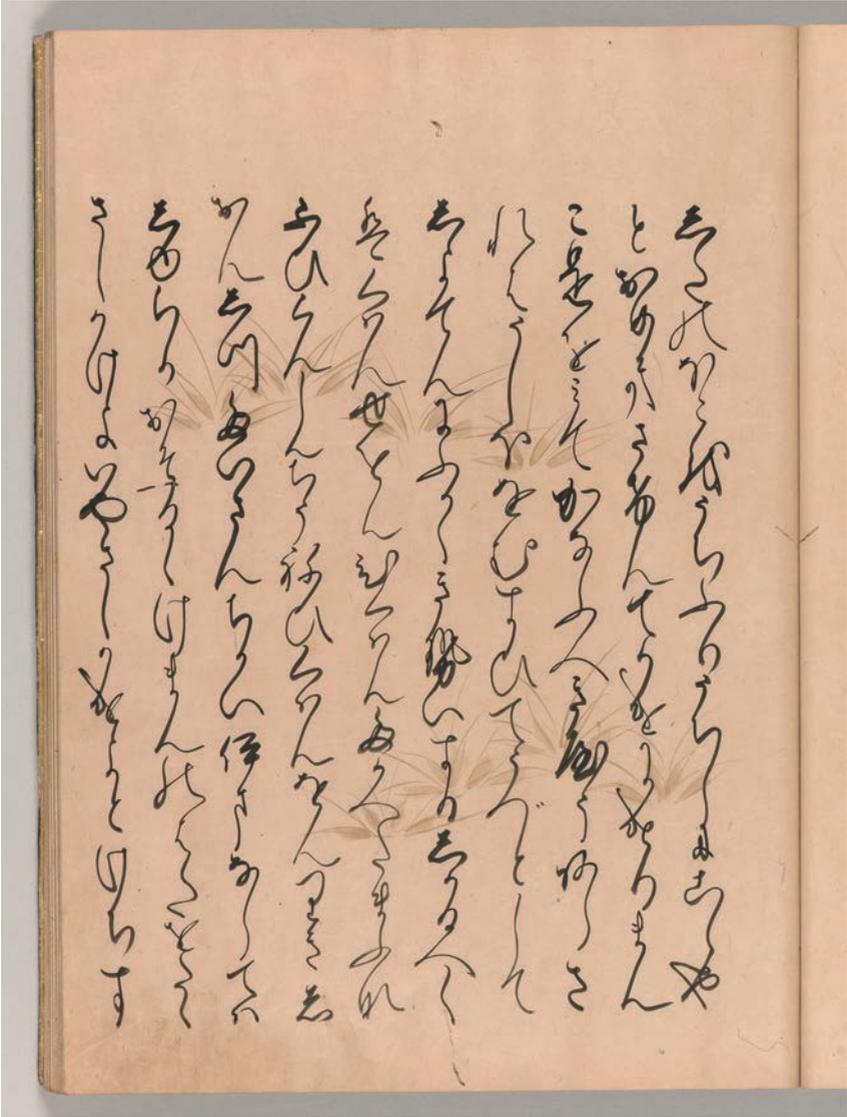
(七ウ)



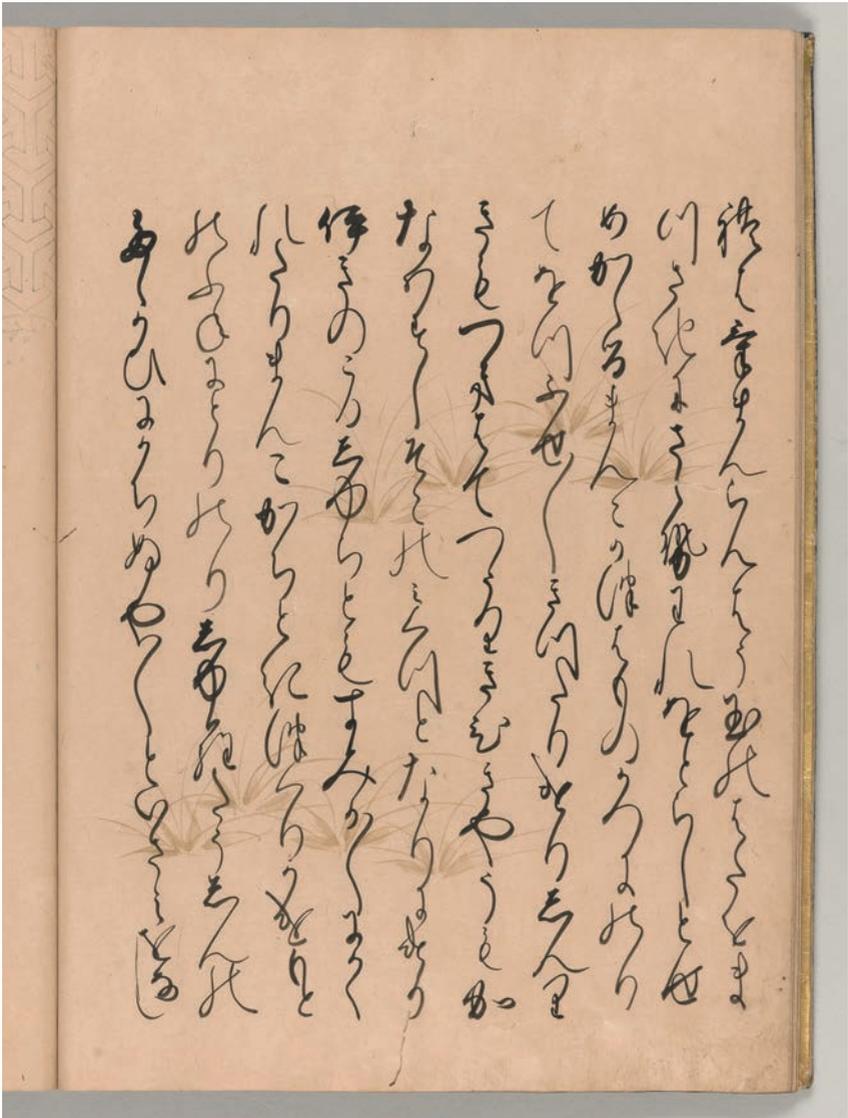
(八才)



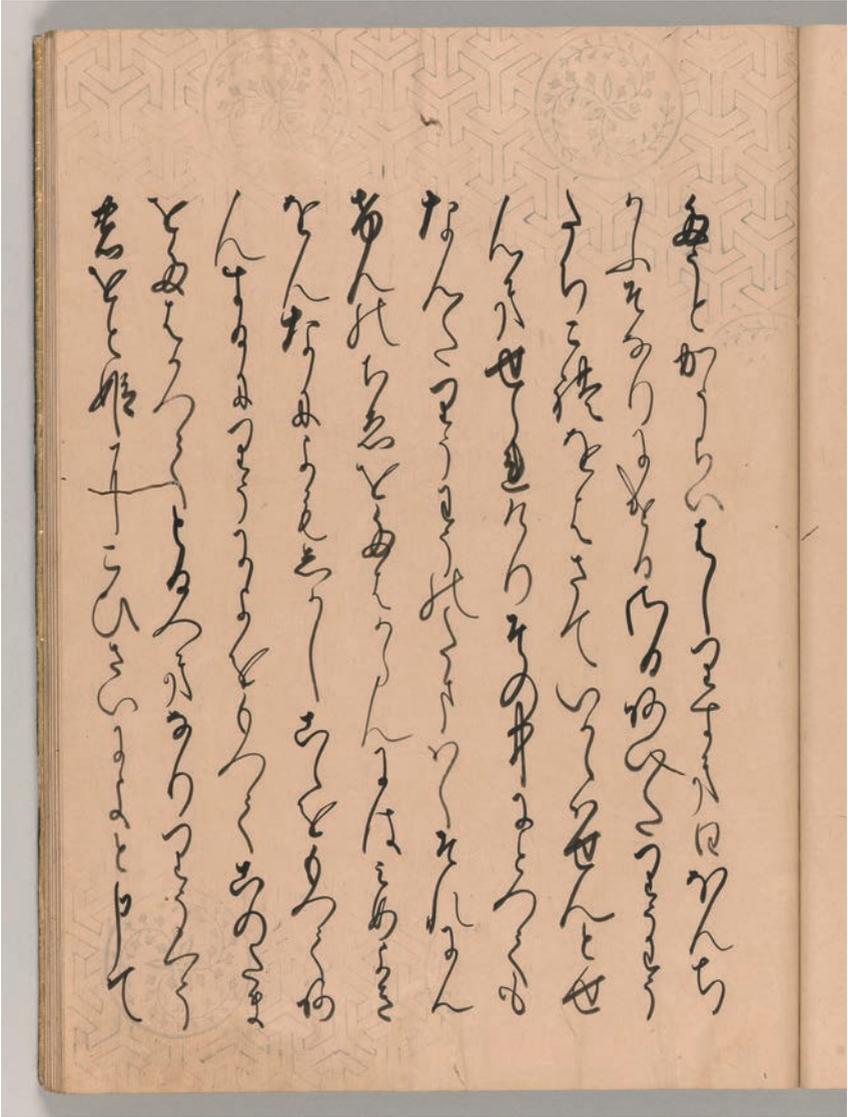
(ハウ)



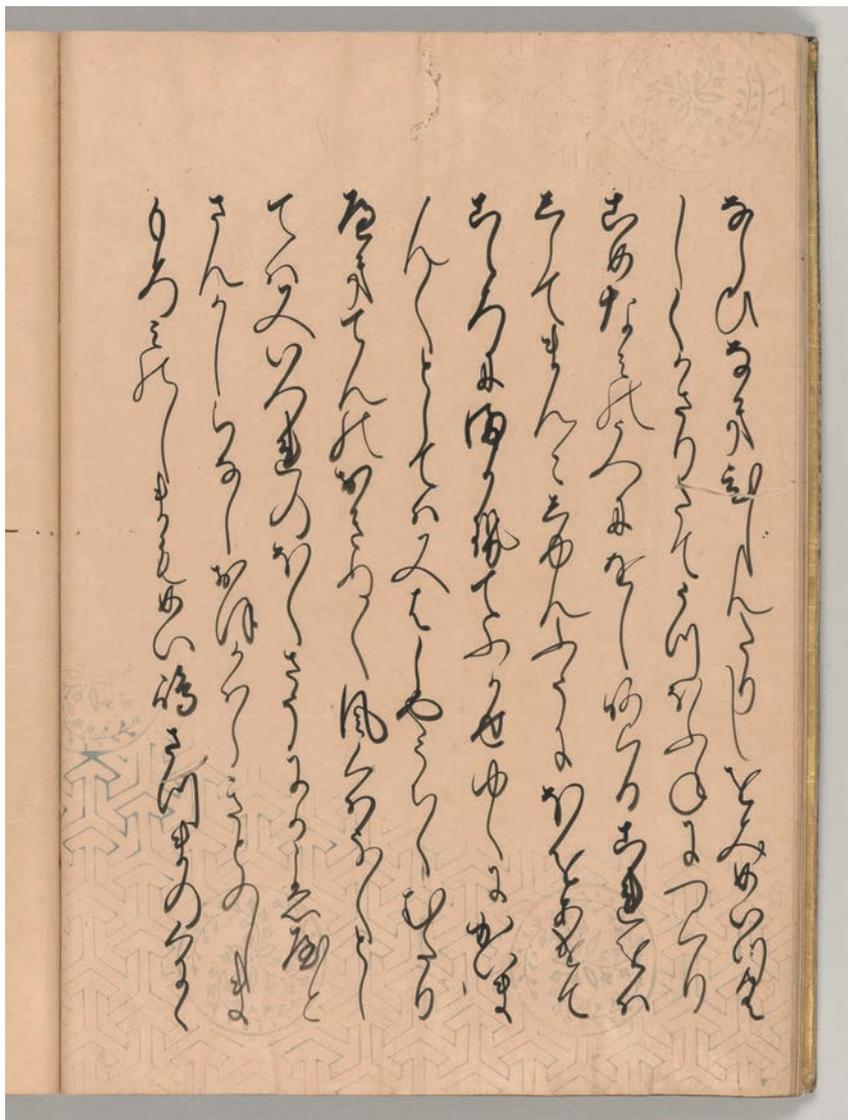
(九才)



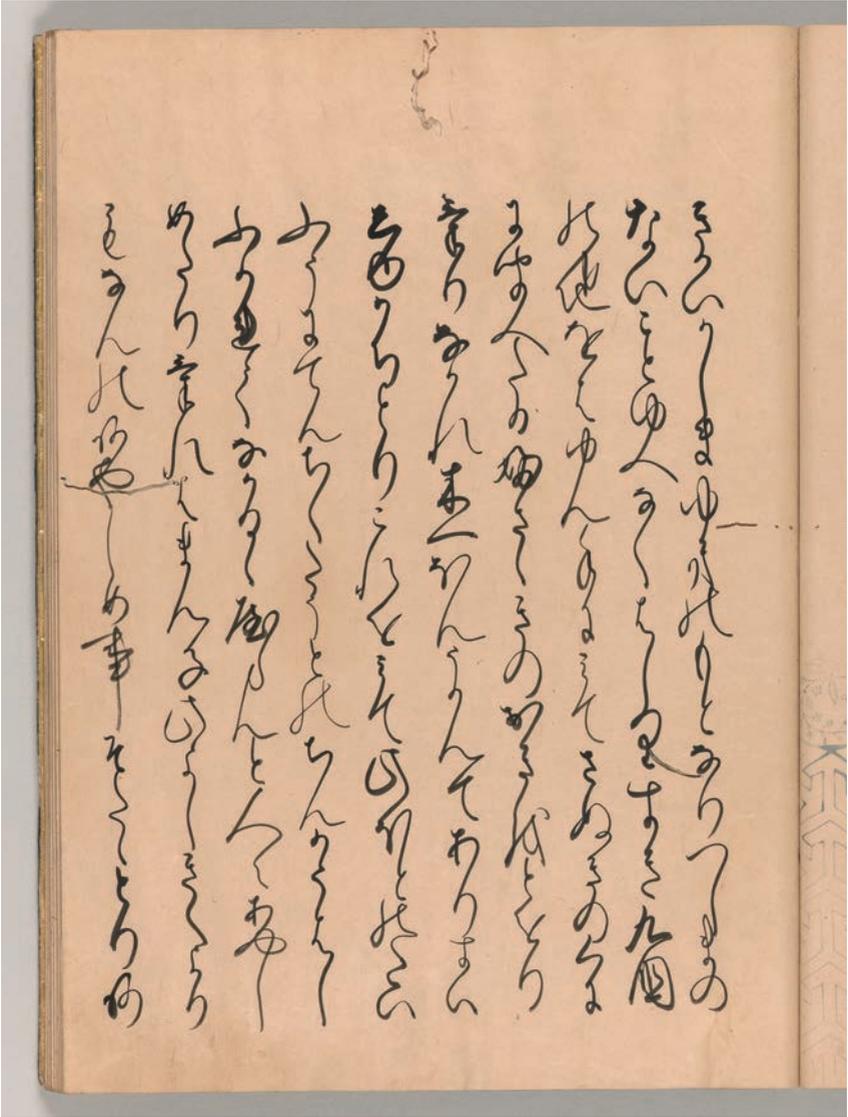
(九ウ)



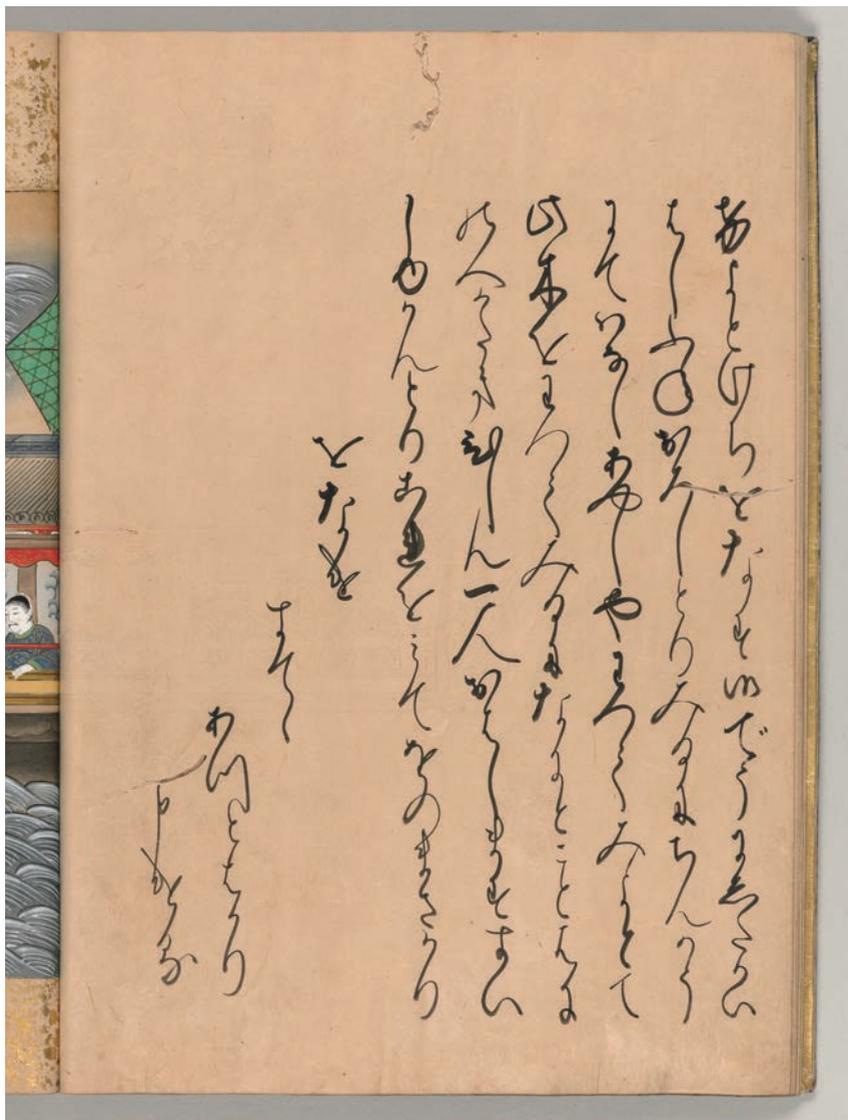
(一〇才)



(一〇ウ)



(一一才)



あまのつらさだつとていづるまはら
しよのひかりしよりみかぬらん
いそぎあやまらむとて
いそぎあやまらむとて
いそぎあやまらむとて
いそぎあやまらむとて
いそぎあやまらむとて
いそぎあやまらむとて

とて

いそぎ

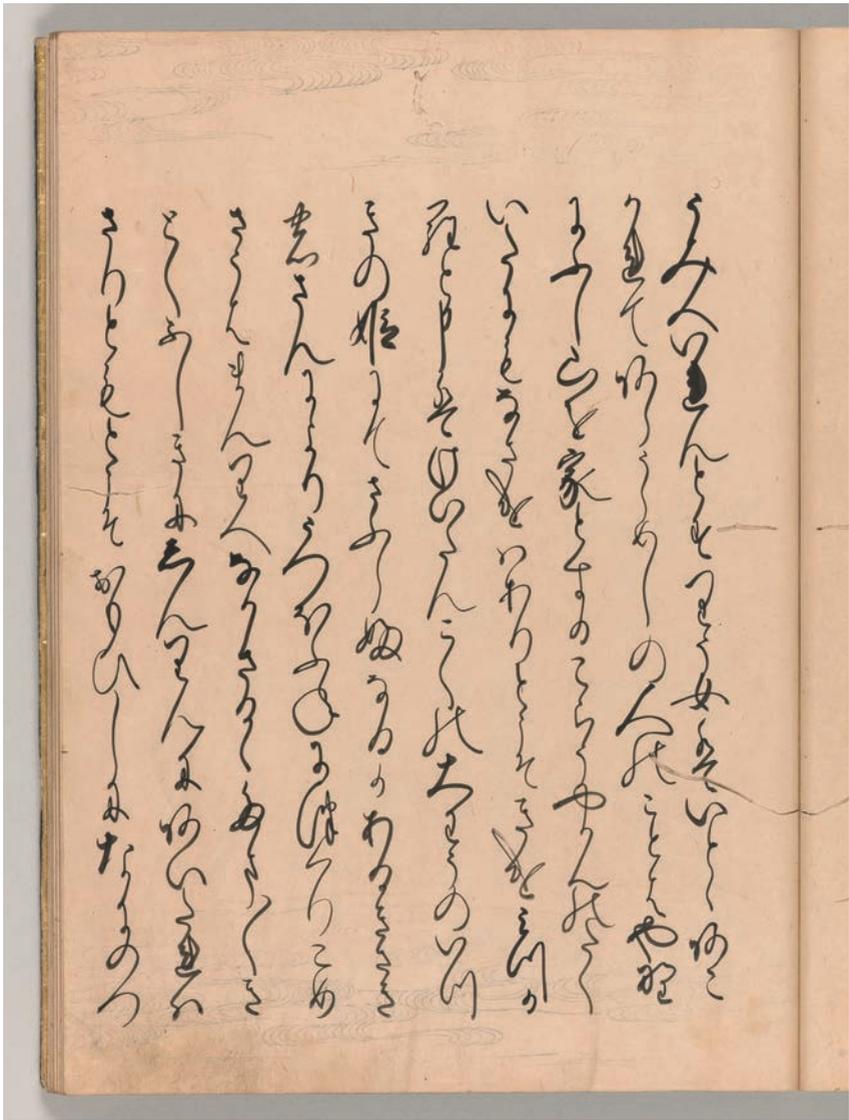
あまのつらさだつとて
いそぎあやまらむとて



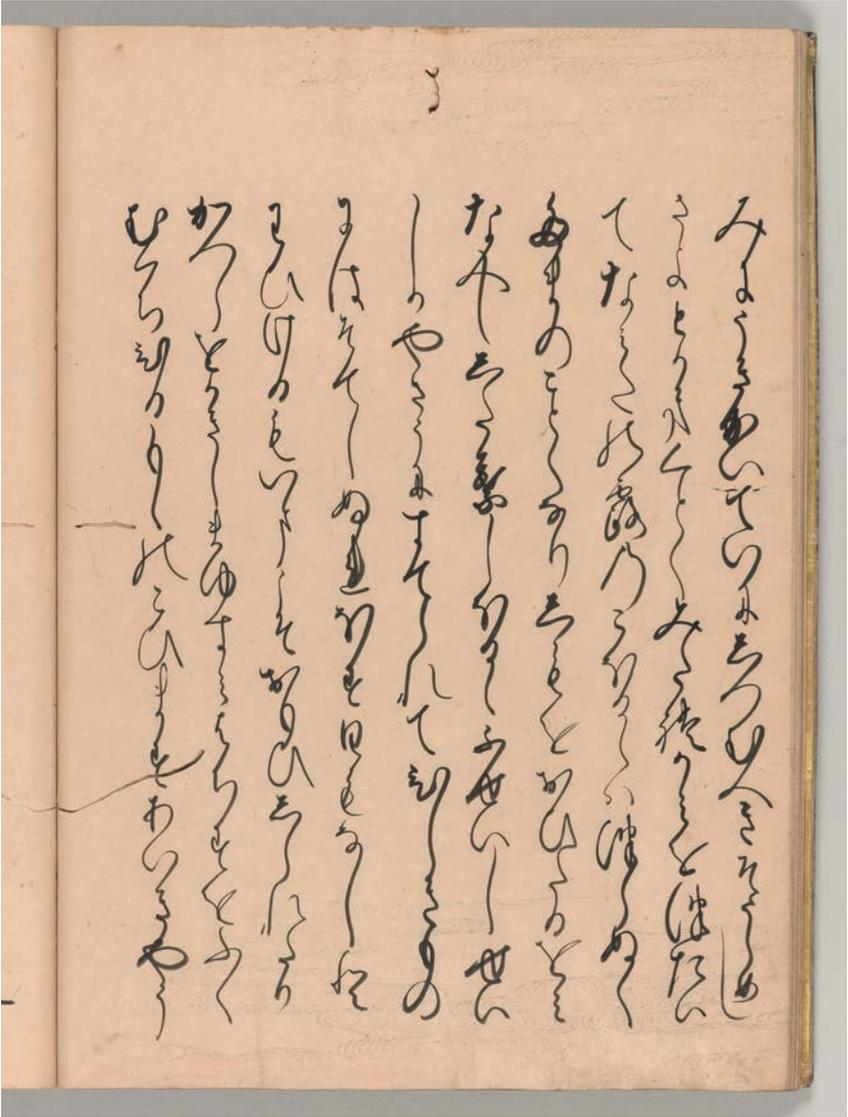
(一二オ)

何んこひしきかたつらき心あはれ
のちこころまじらふんれあきんよ
しむらむらとなんりあきあきわ
しむらむらひひかたつらき心あはれ
しむらむらしむらむらむらむらむら
しむらむらむらむらむらむらむら
むらむらむらむらむらむらむらむら
むらむらむらむらむらむらむらむら
むらむらむらむらむらむらむらむら
むらむらむらむらむらむらむらむら
むらむらむらむらむらむらむらむら

(一ニウ)

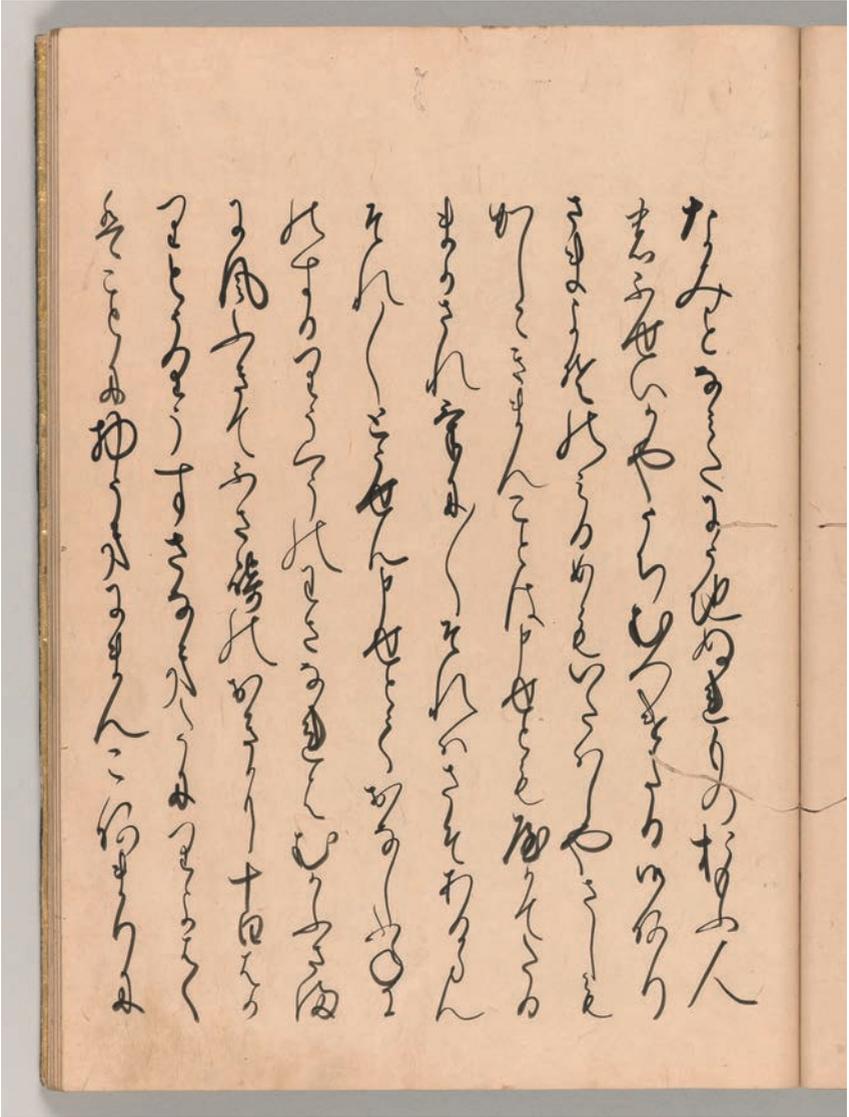


(一三才)



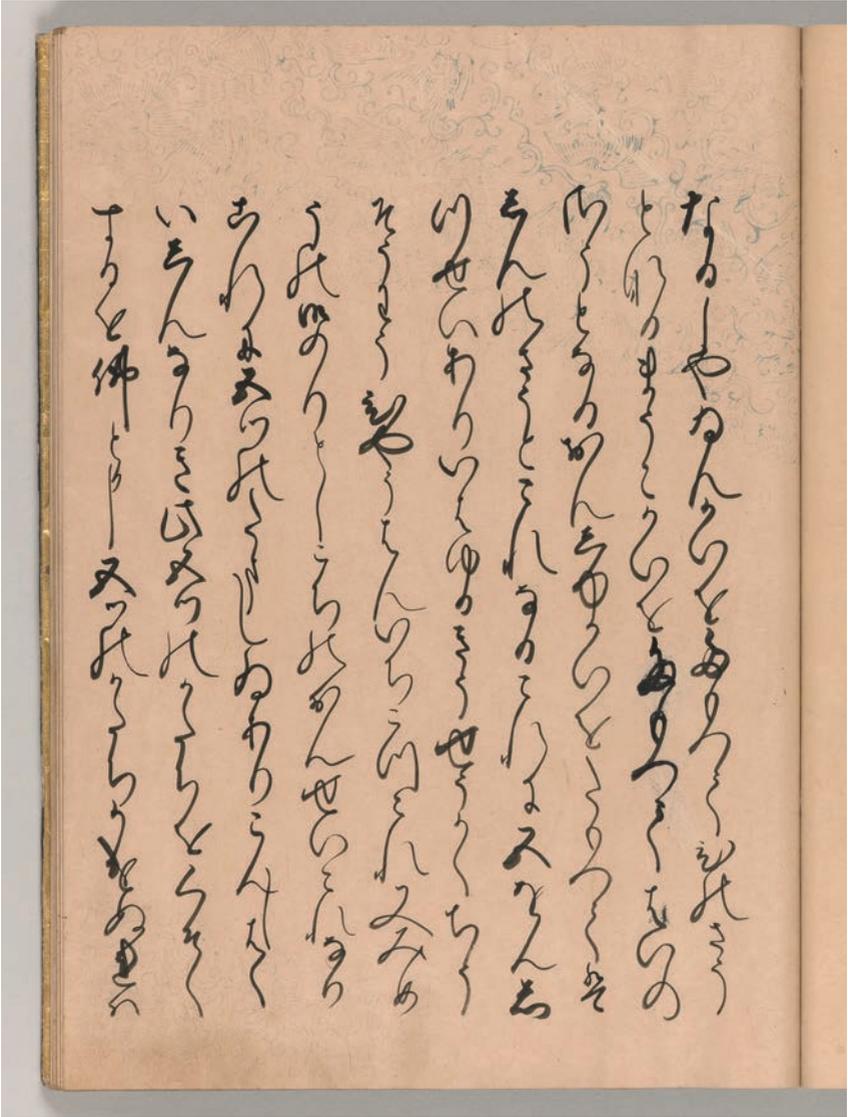
みよしきあすのまろくひんりし
うよしきあすのまろくひんりし
しなまろくひんりし
あすのまろくひんりし
なまろくひんりし
しなまろくひんりし
あすのまろくひんりし
なまろくひんりし
しなまろくひんりし
あすのまろくひんりし
なまろくひんりし
しなまろくひんりし

(一三ウ)

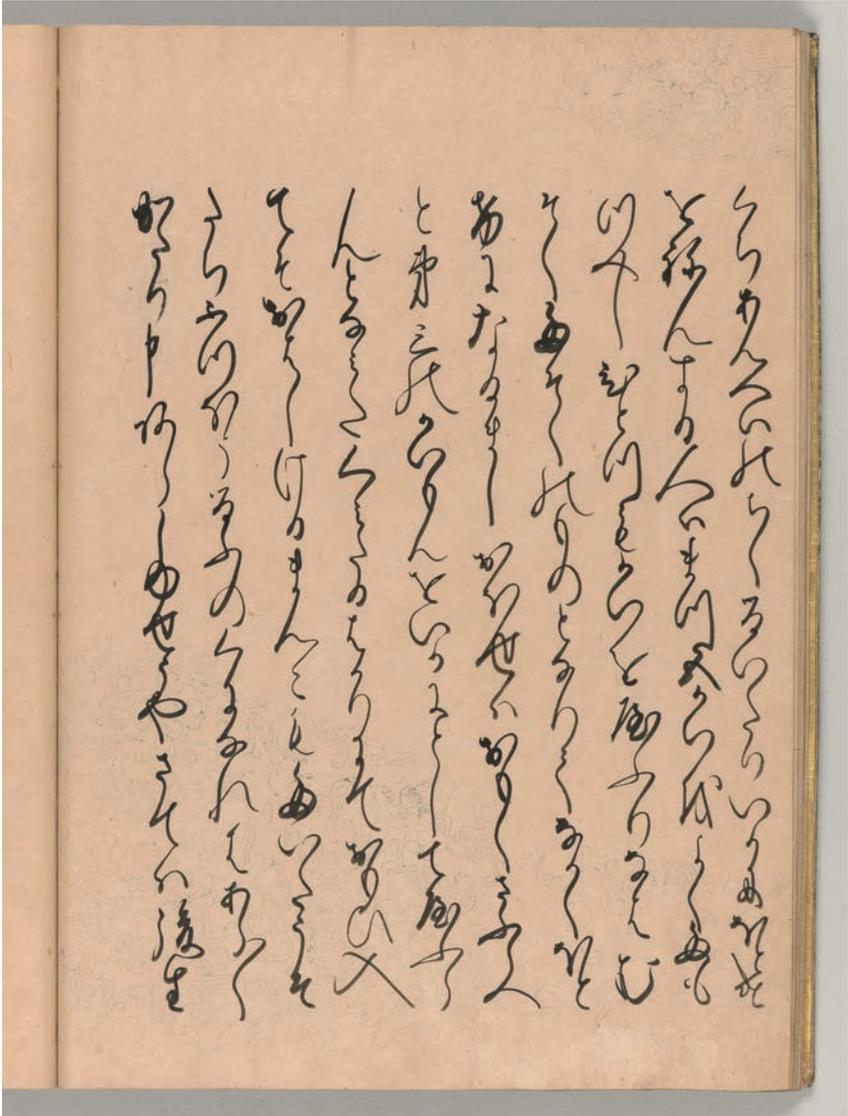


(一四才)

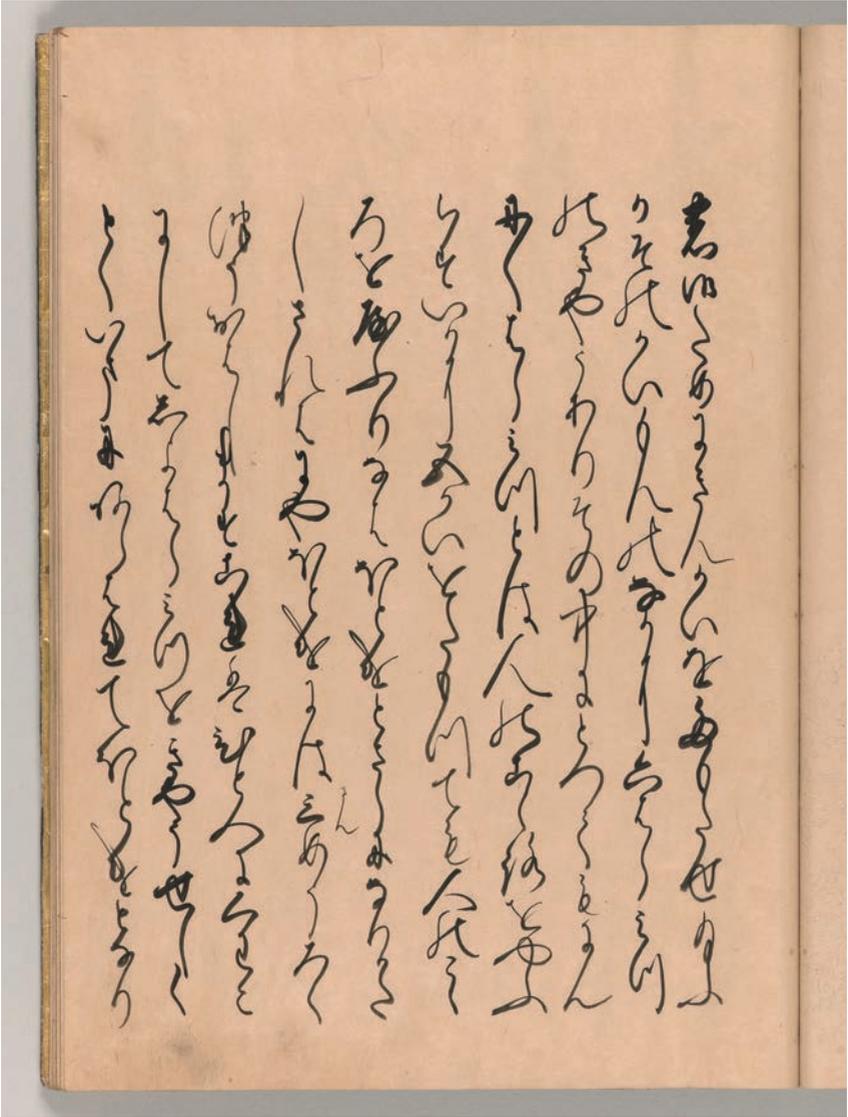
あつちのうらみはあつちのうらみ
あつちのうらみはあつちのうらみ
あつちのうらみはあつちのうらみ
あつちのうらみはあつちのうらみ
あつちのうらみはあつちのうらみ
あつちのうらみはあつちのうらみ
あつちのうらみはあつちのうらみ
あつちのうらみはあつちのうらみ
あつちのうらみはあつちのうらみ
あつちのうらみはあつちのうらみ



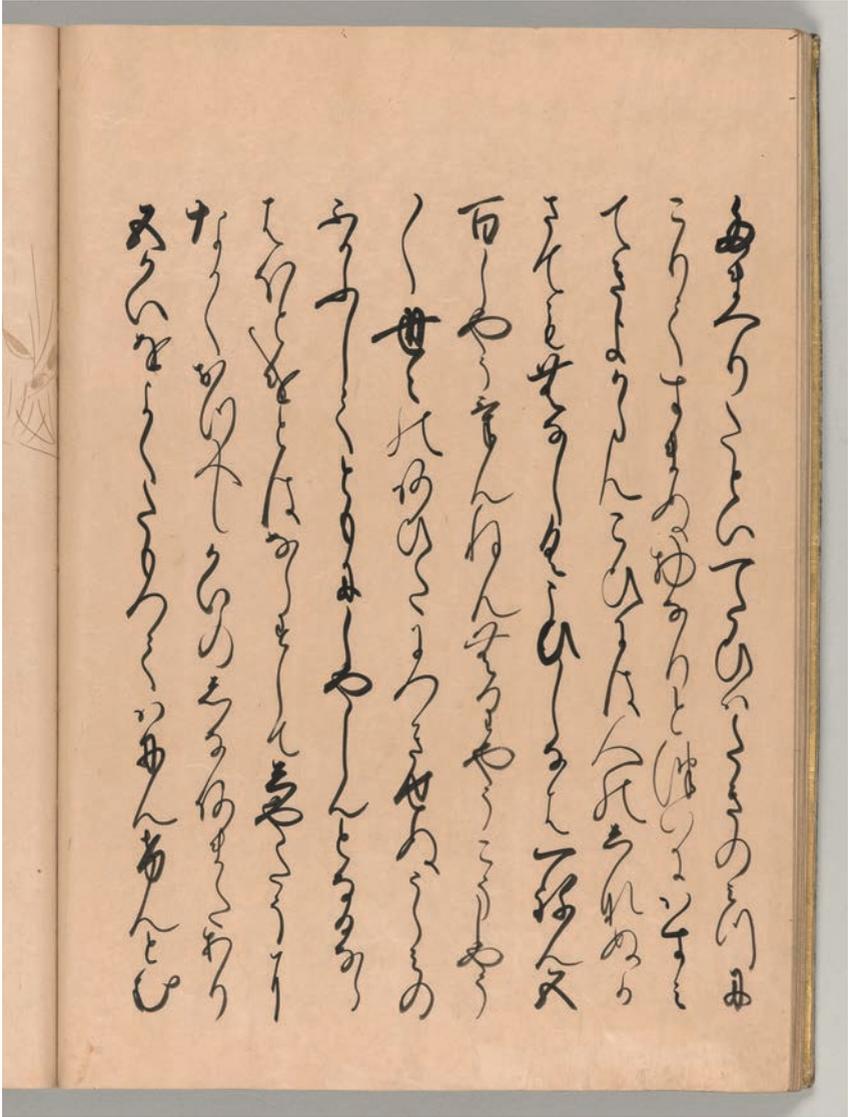
(一六才)



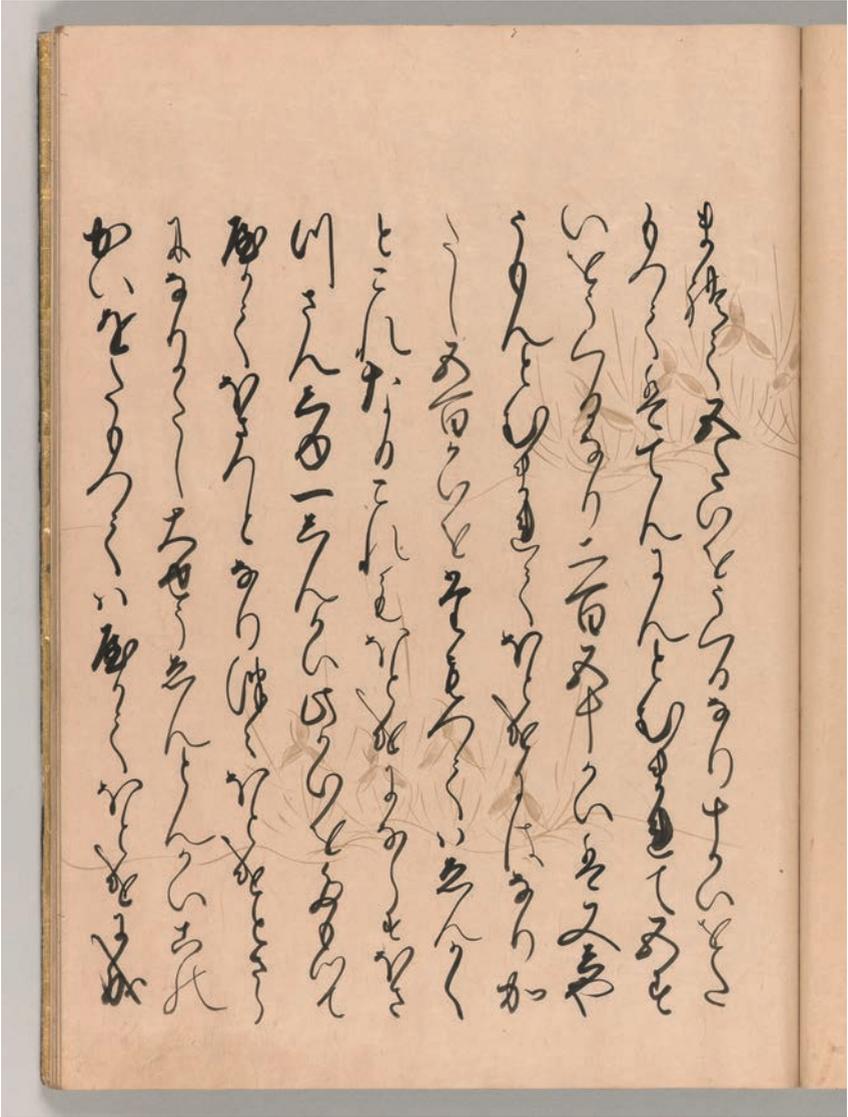
(一六ウ)

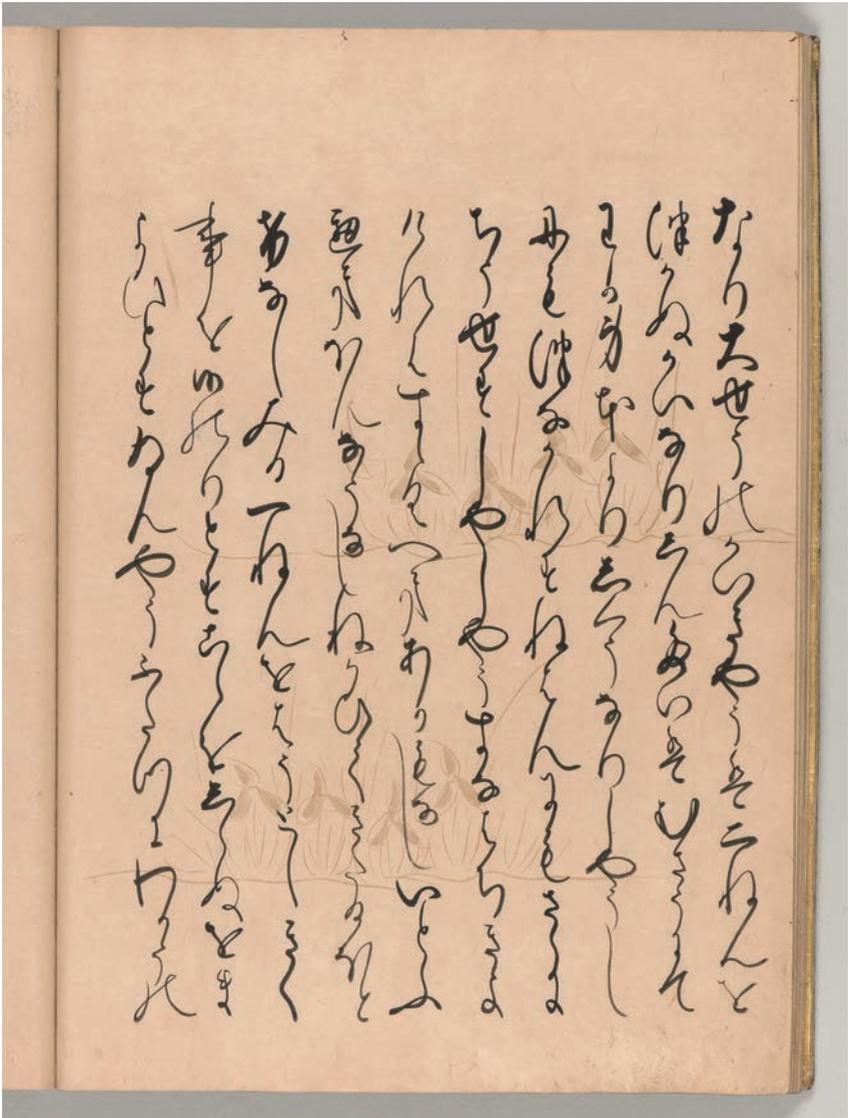


(一七才)

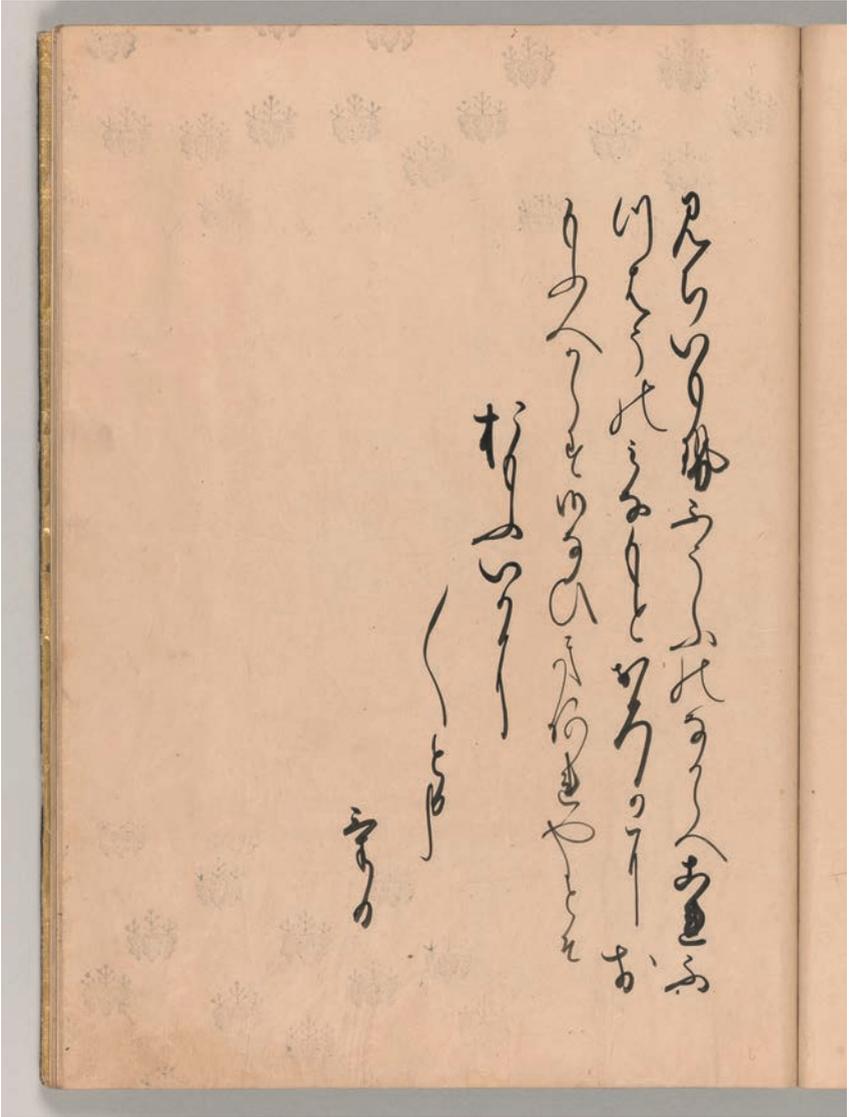


(一七ウ)





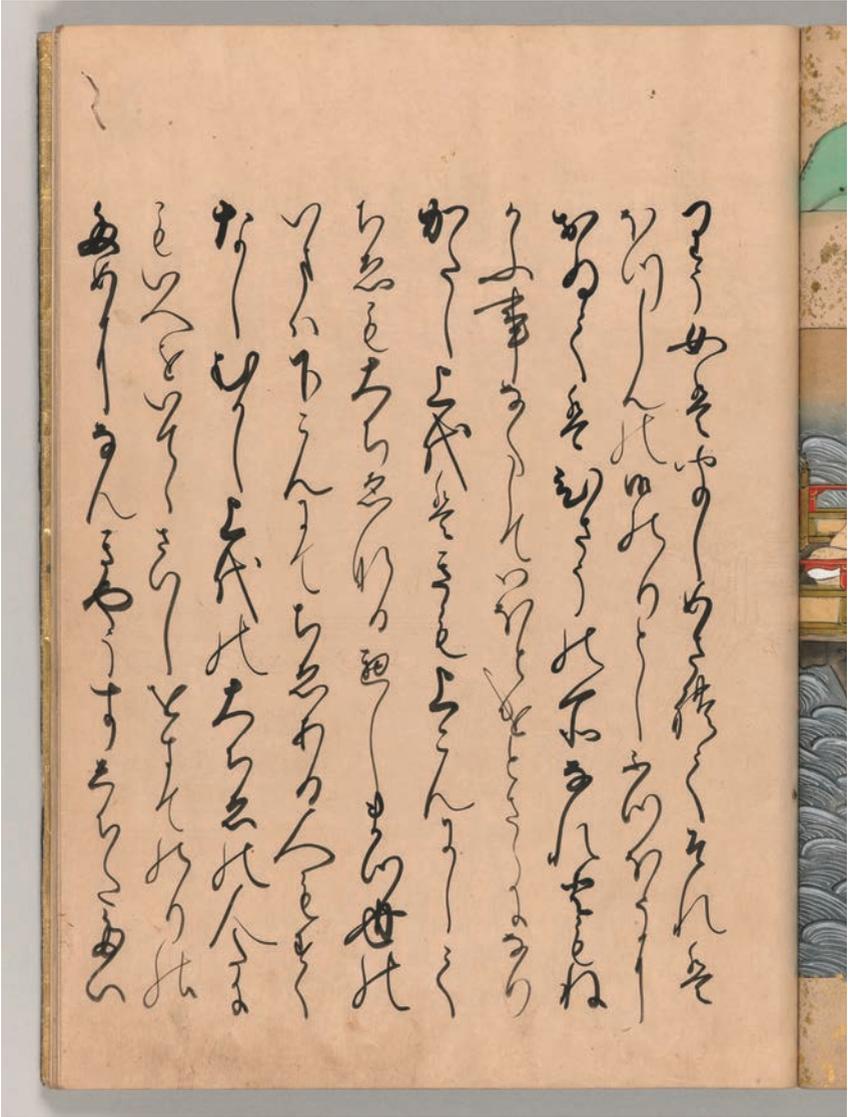
(一八ウ)



(一九オ)



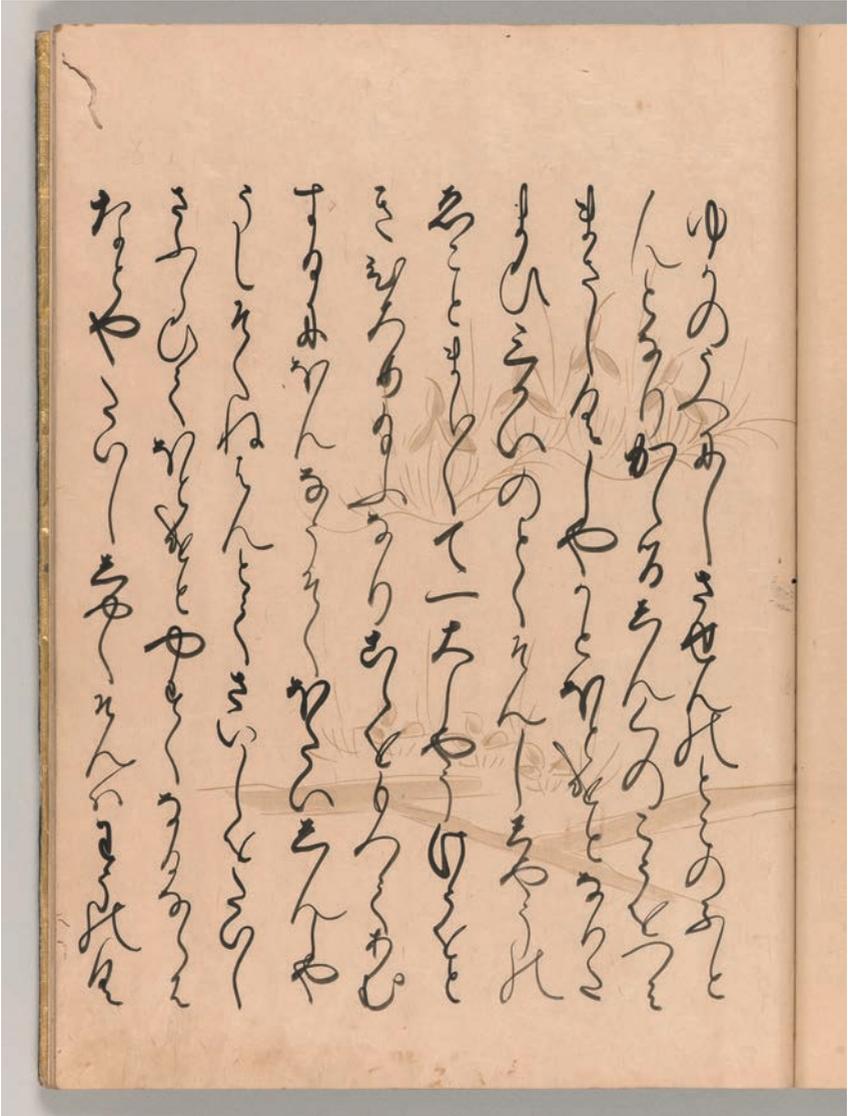
(一九ウ)



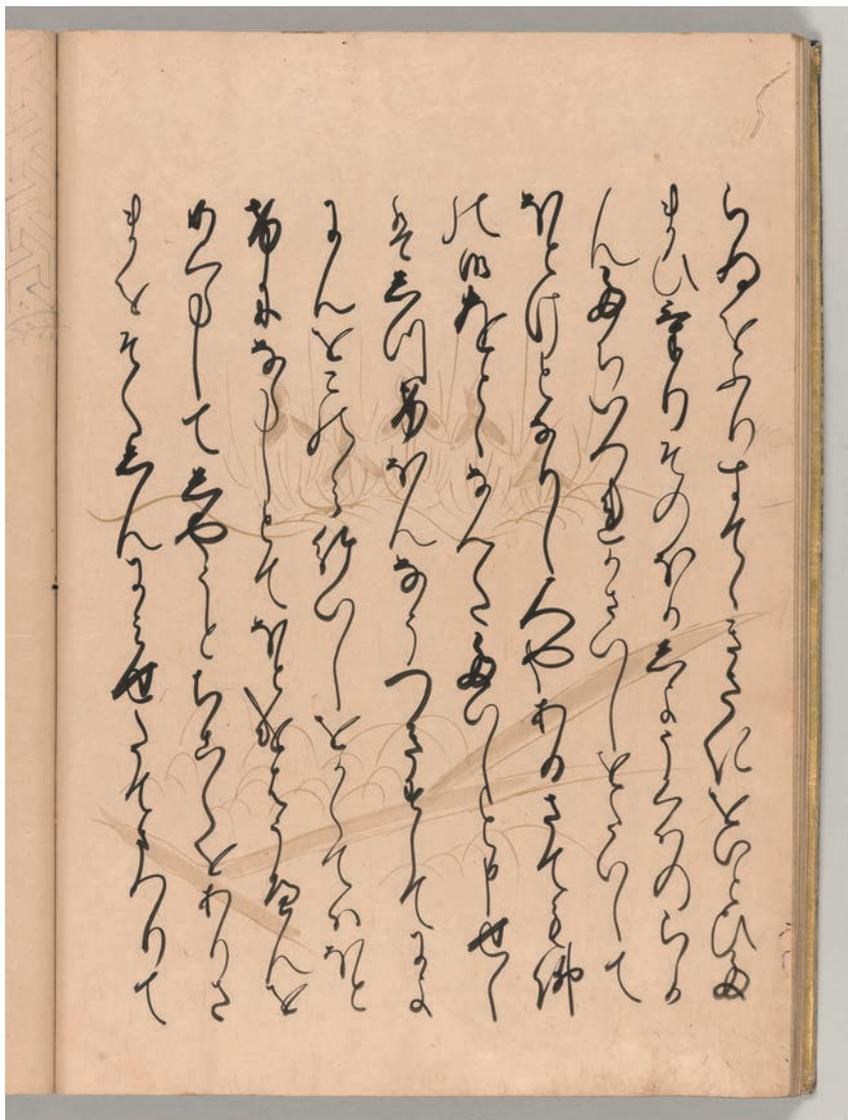
(二〇オ)

一其のつゝるる百せはれを井
とよりよれまのきくらりあ
一御もぬれまよとせうえ
十九のくあひまをらんか
せんれまのあせんんと
とものまのせんんと
あまのあまのせんんと
とものあまのせんんと
とものあまのせんんと
とものあまのせんんと

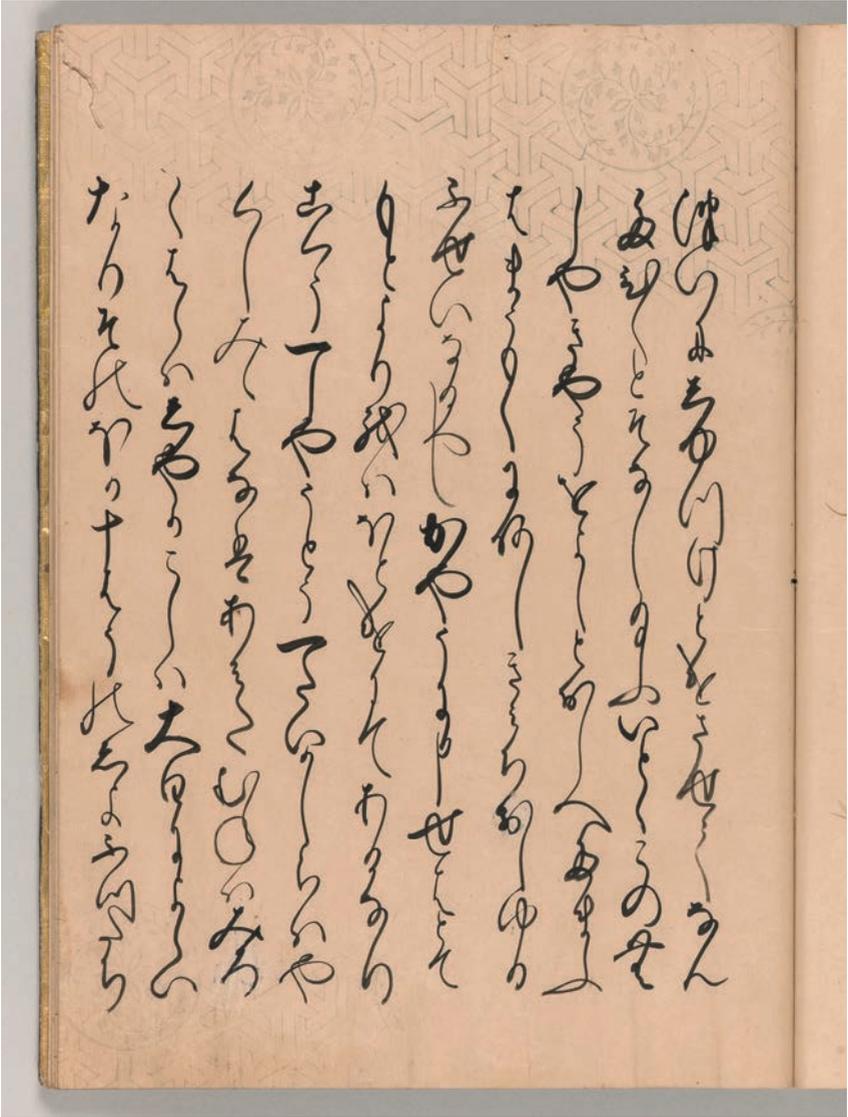
(二〇ウ)



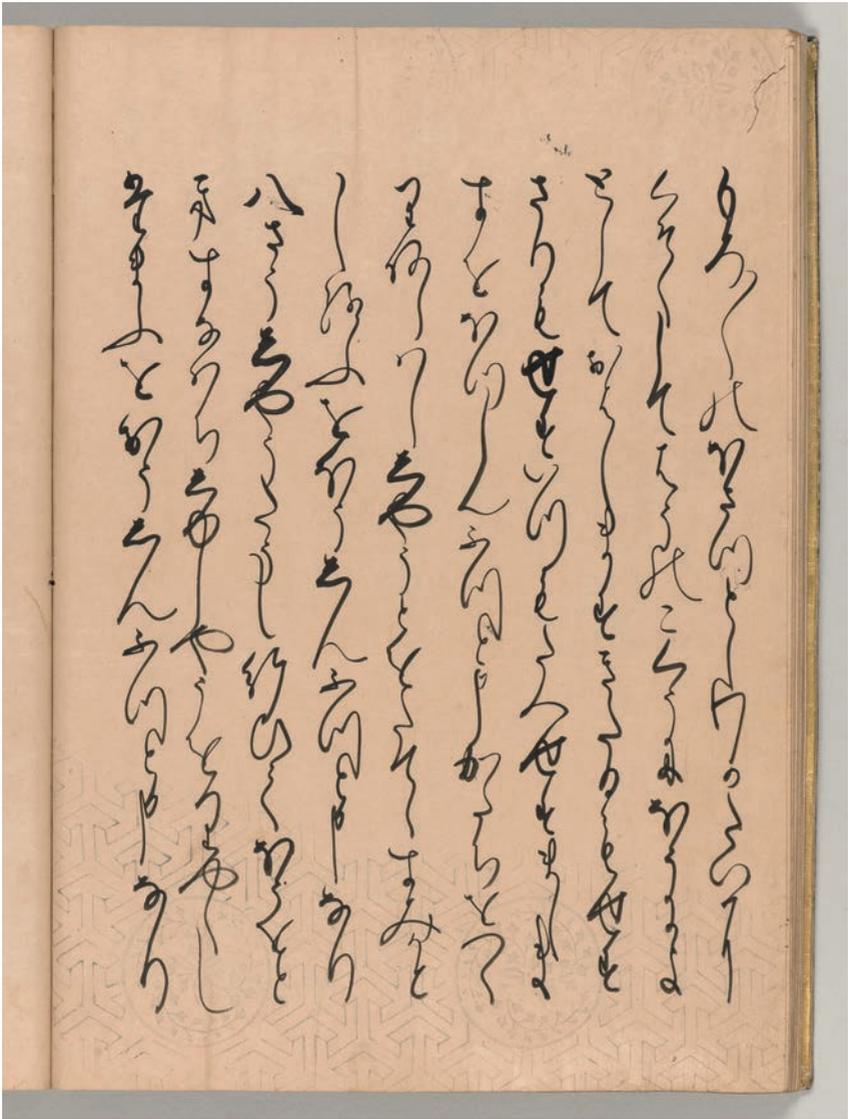
(二一オ)



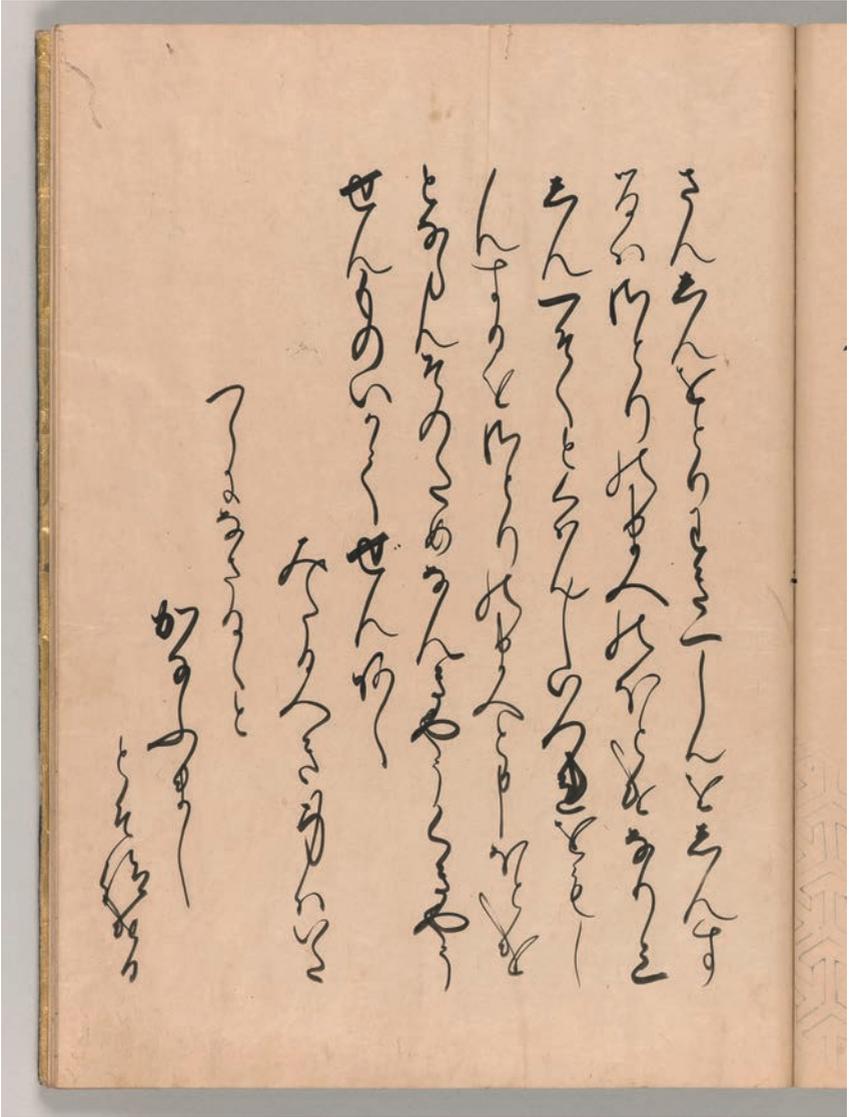
(二一ウ)



(二二オ)



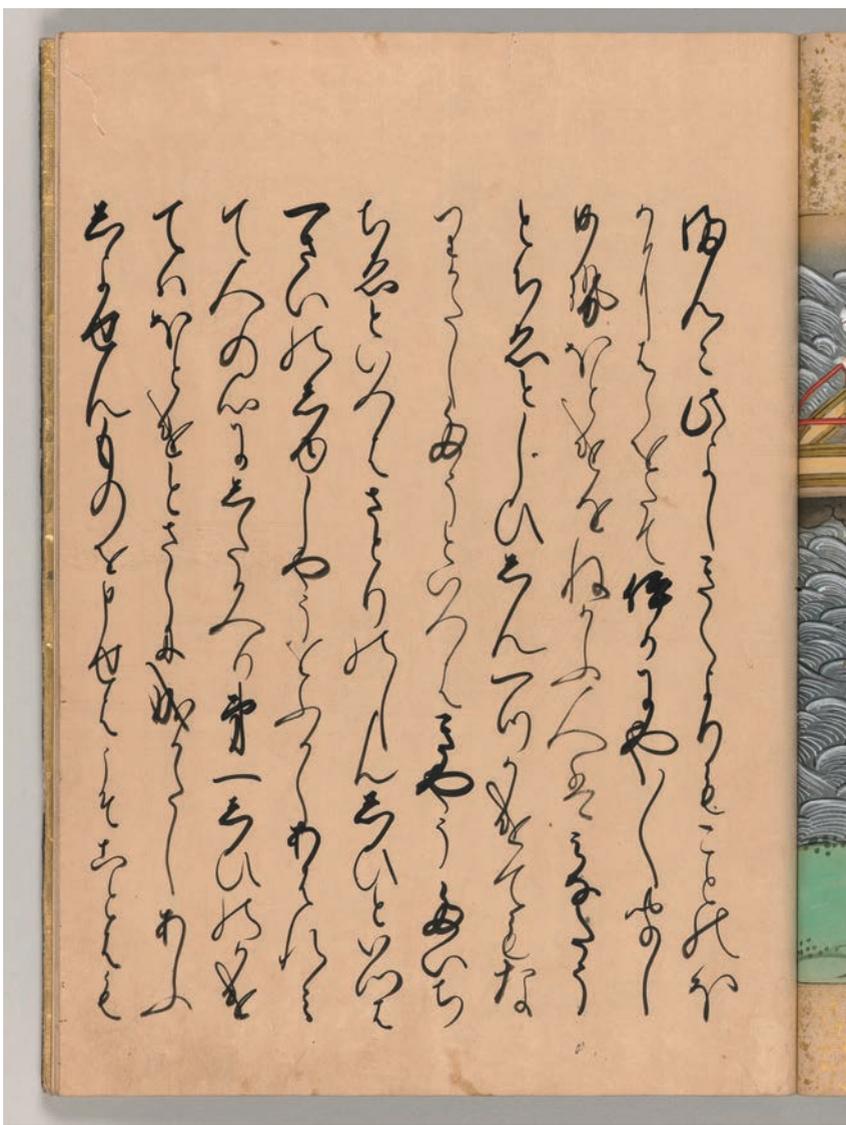
(二二ウ)



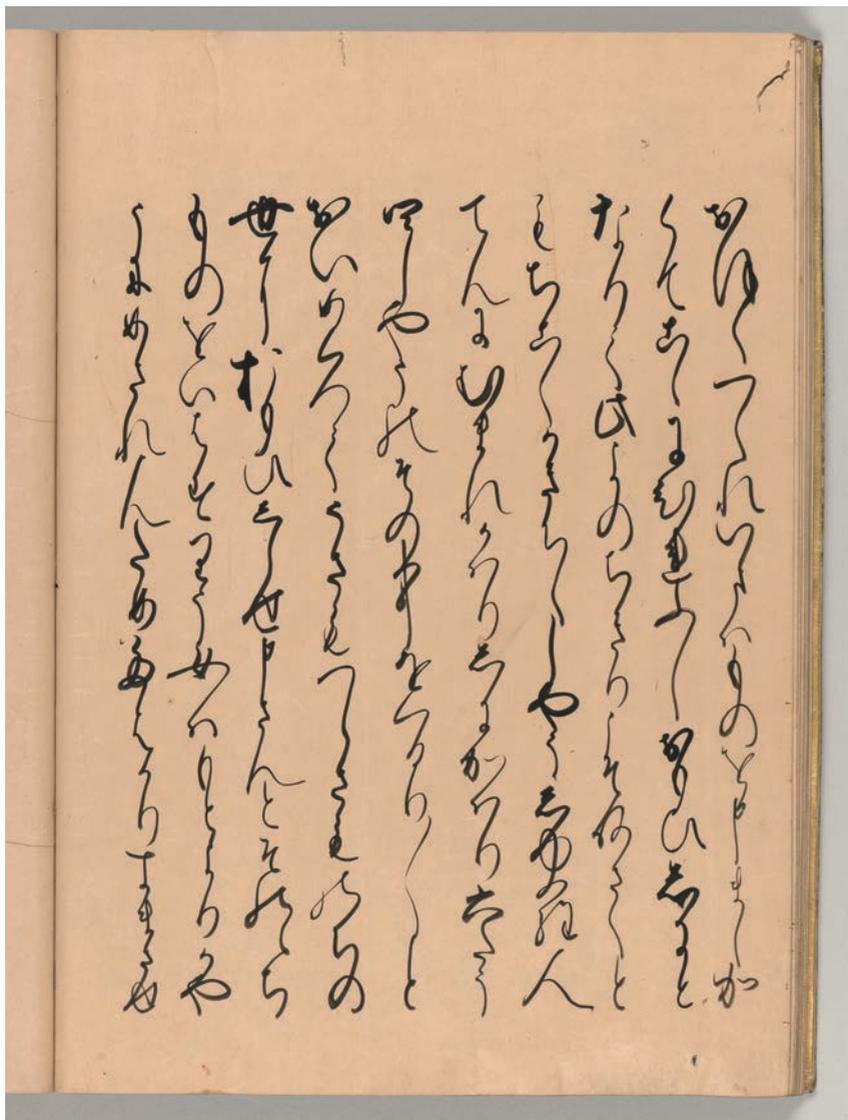
(二三オ)



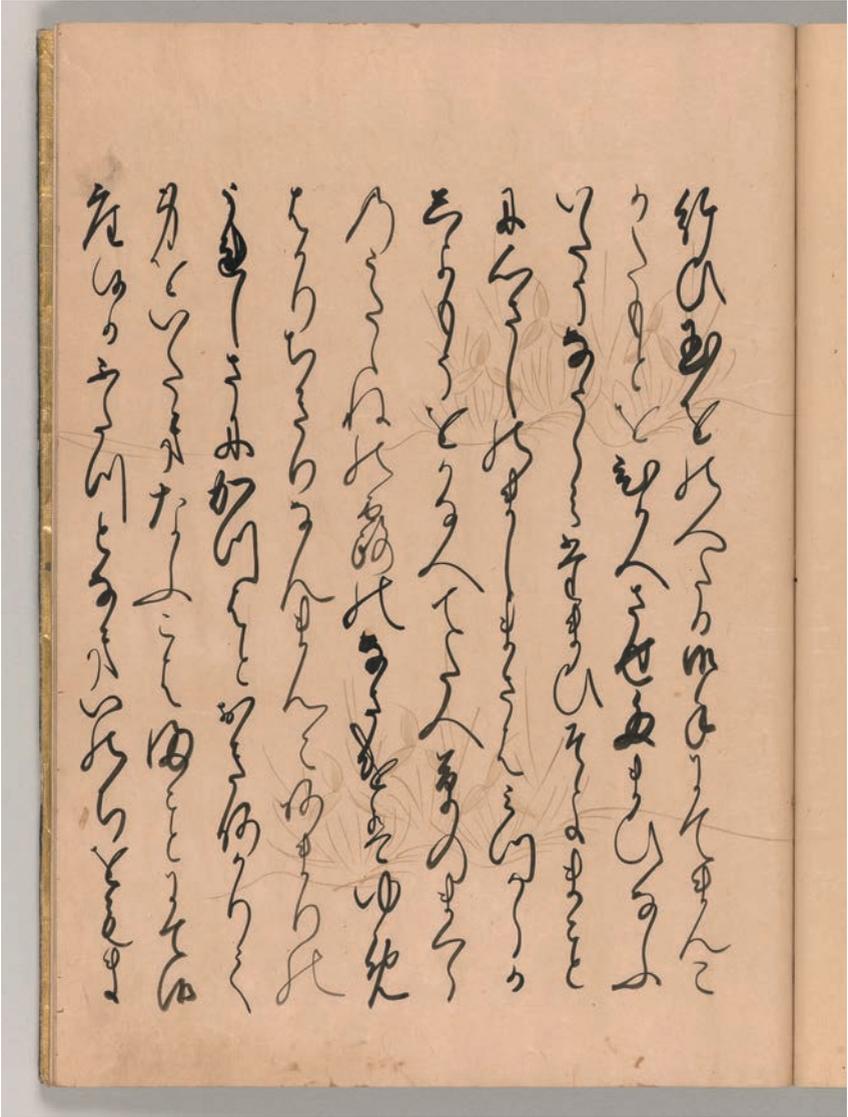
(二三ウ)



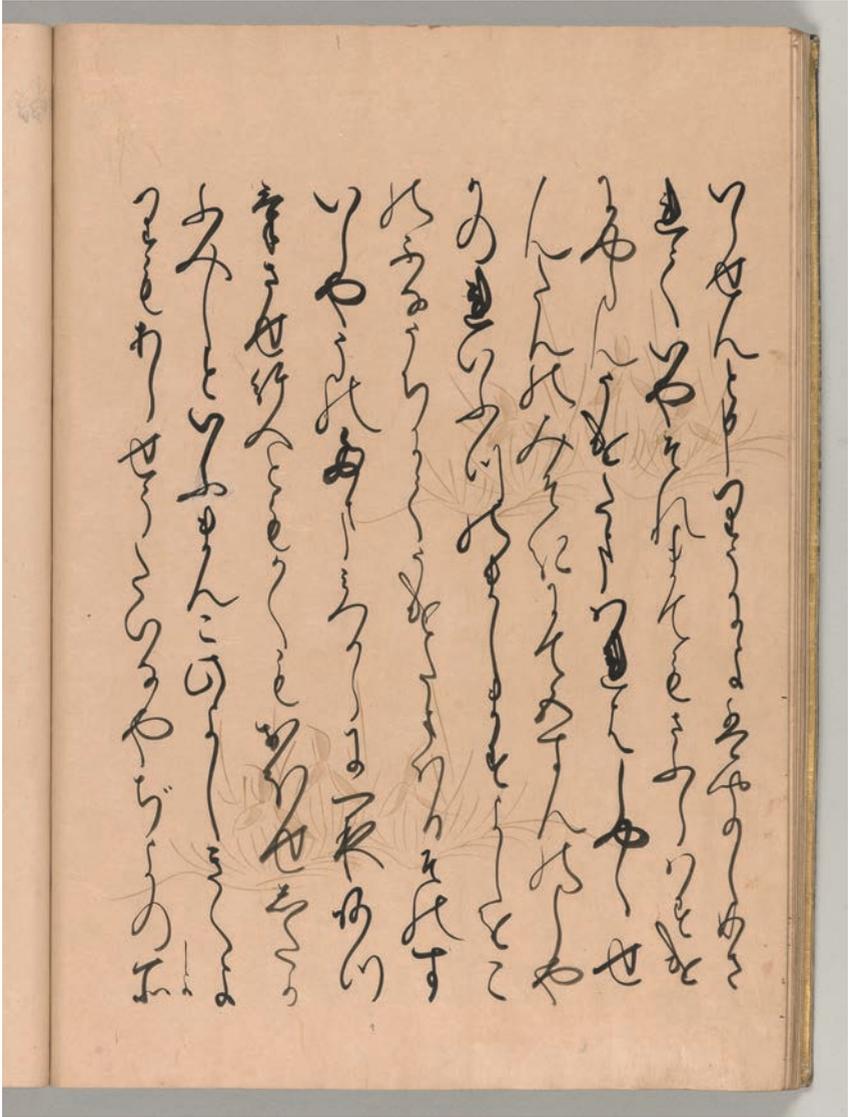
(二四オ)



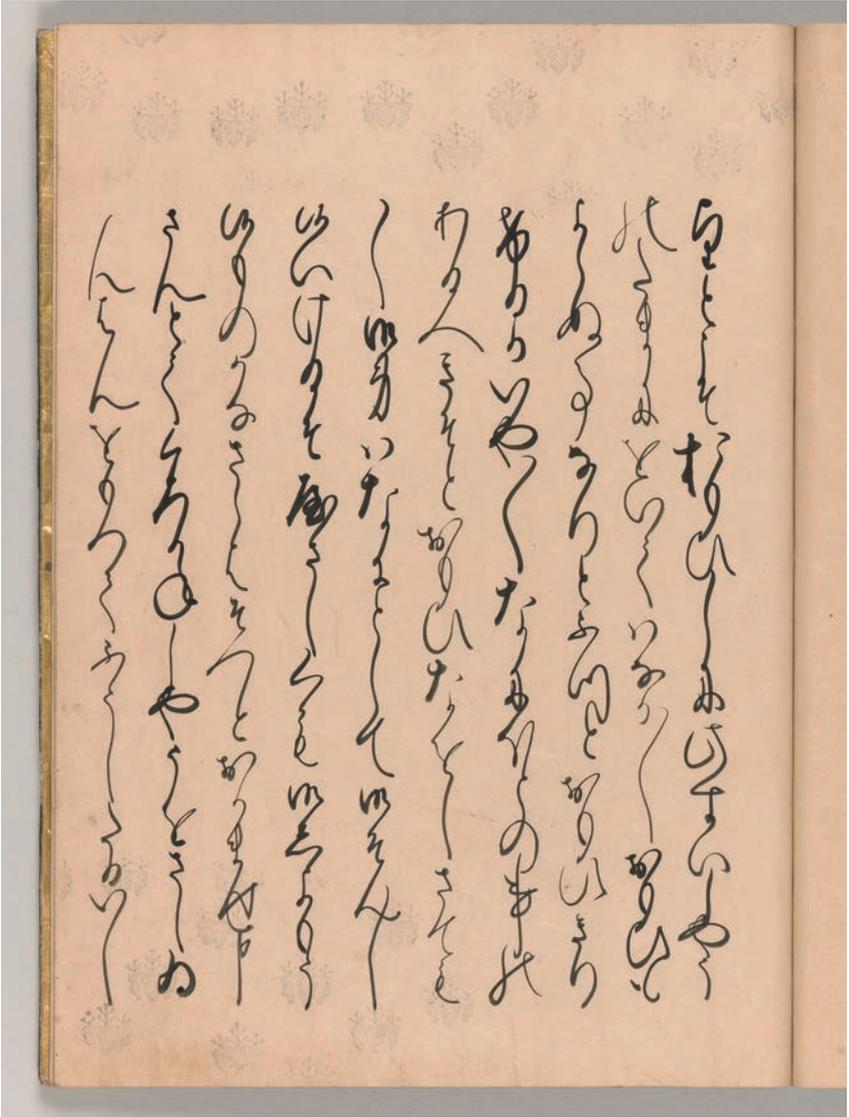
(二四ウ)



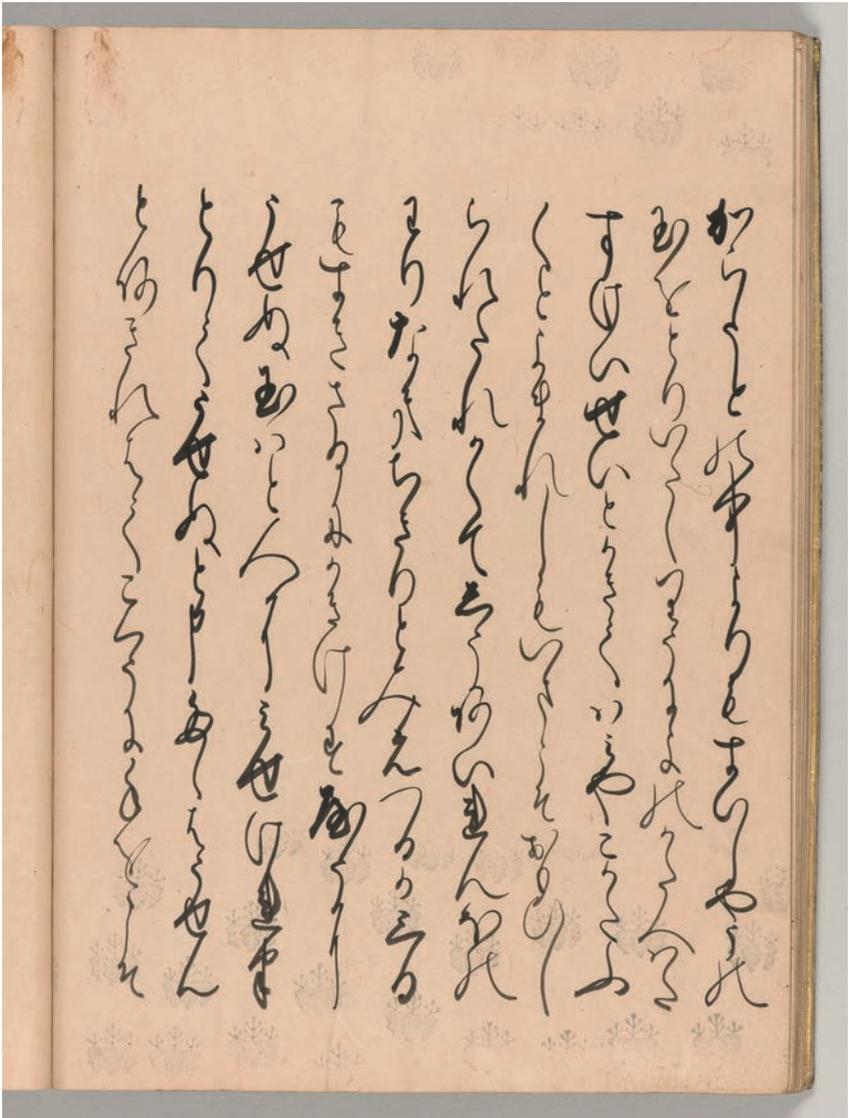
(二五才)



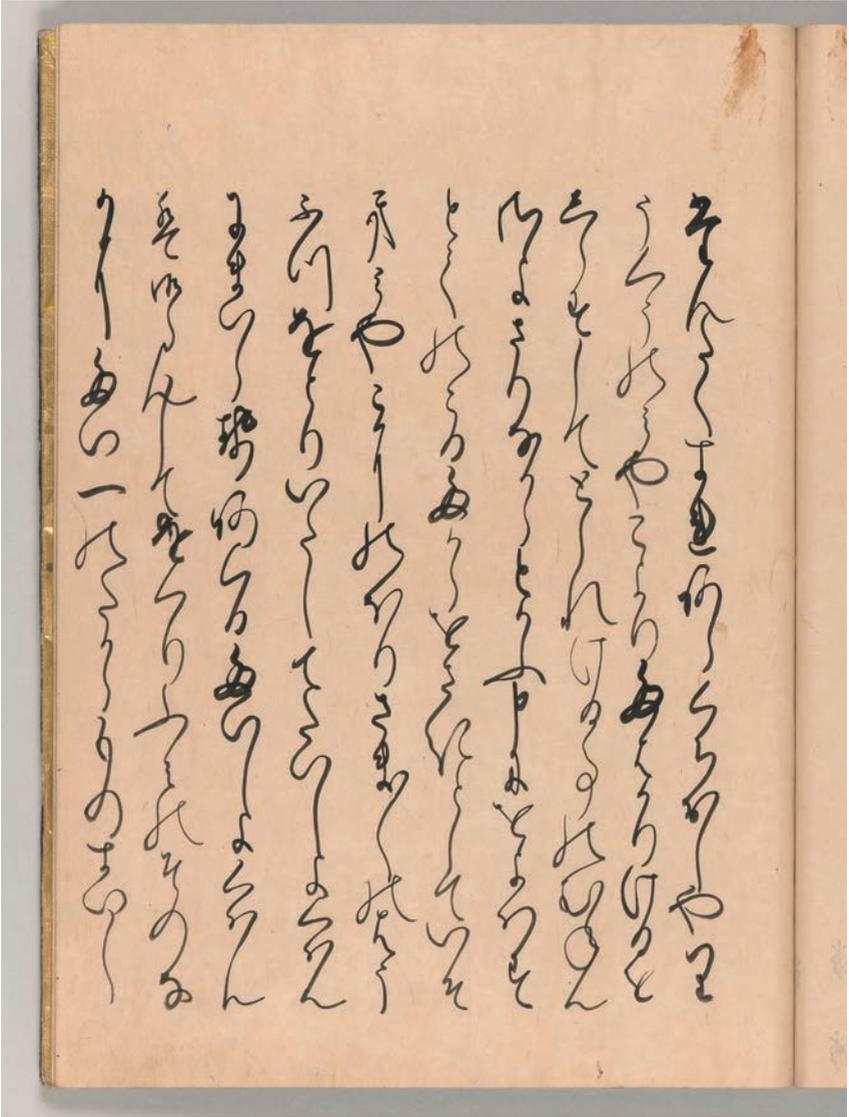
(二五ウ)



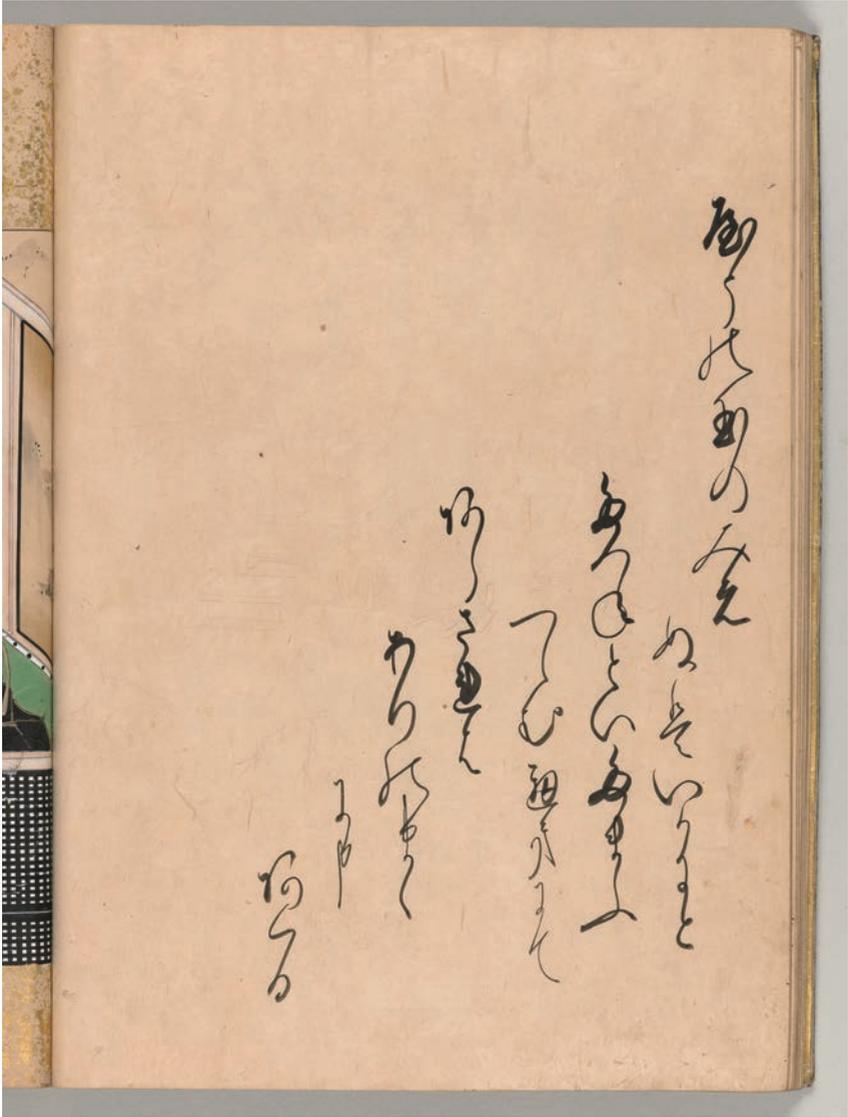
(二六才)



(二六ウ)



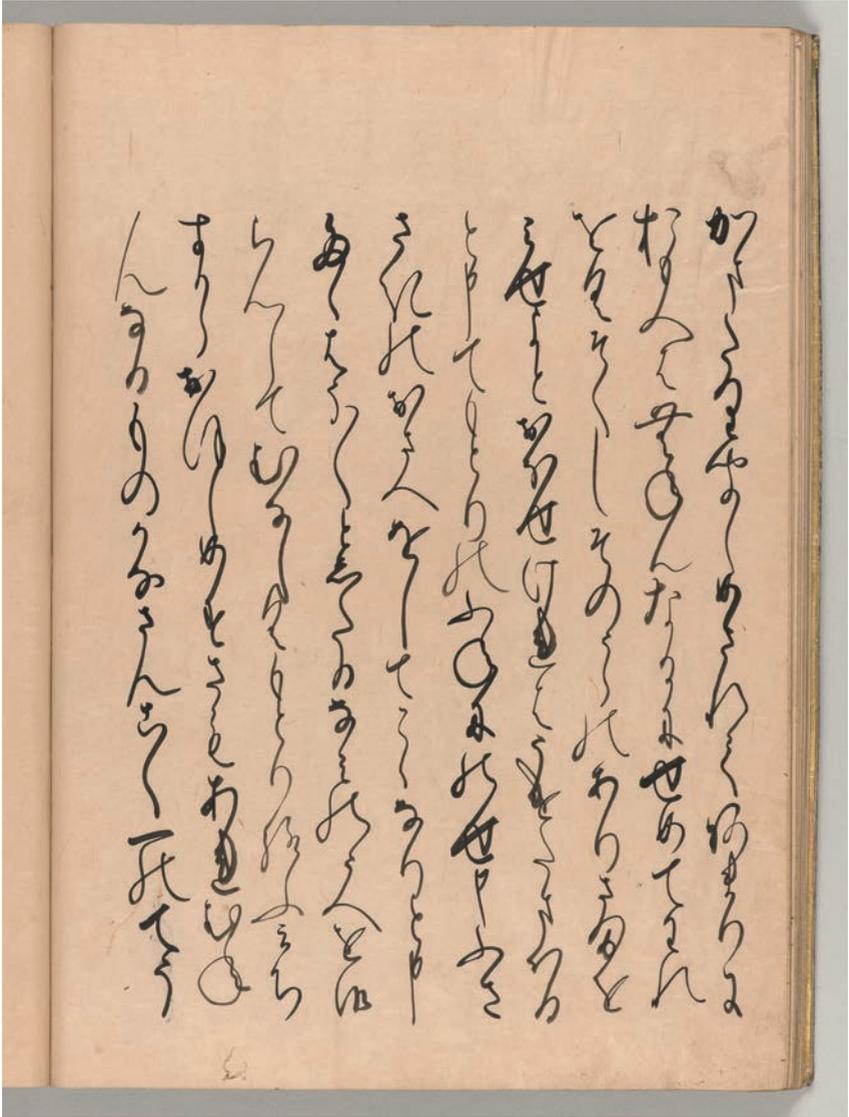
(二七オ)



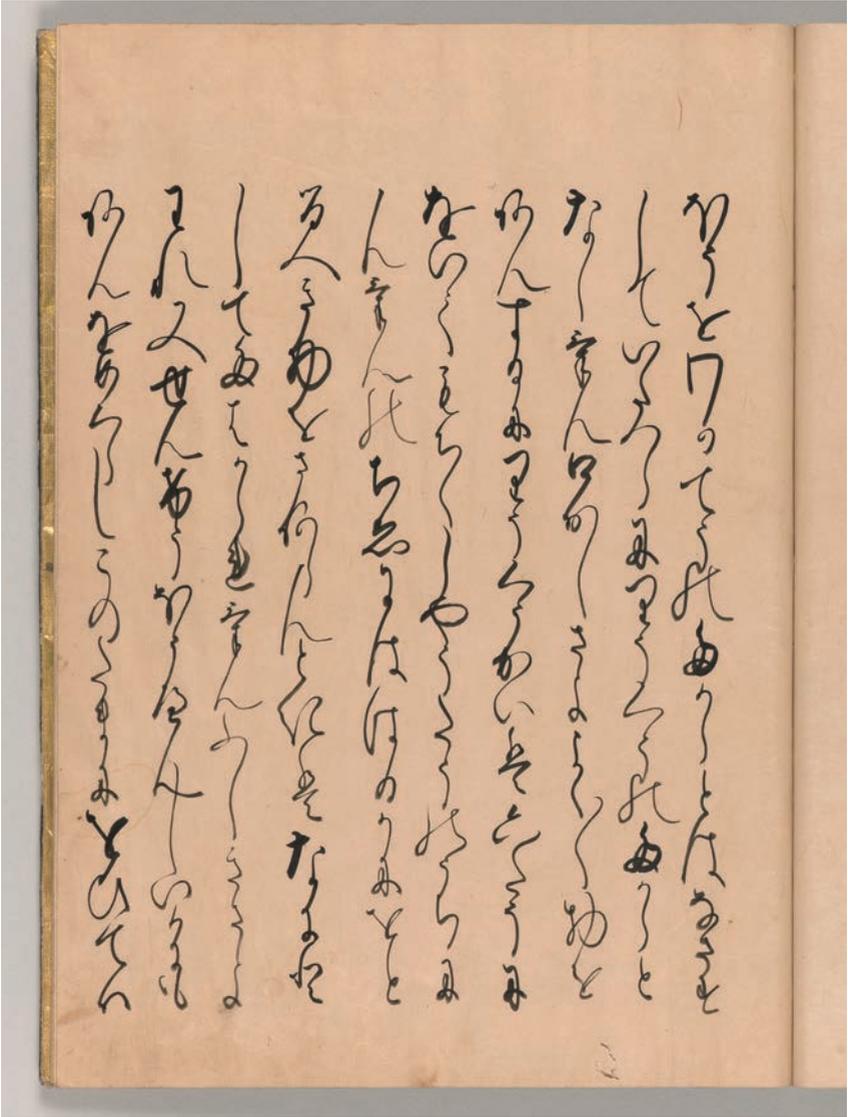
(二七ウ)



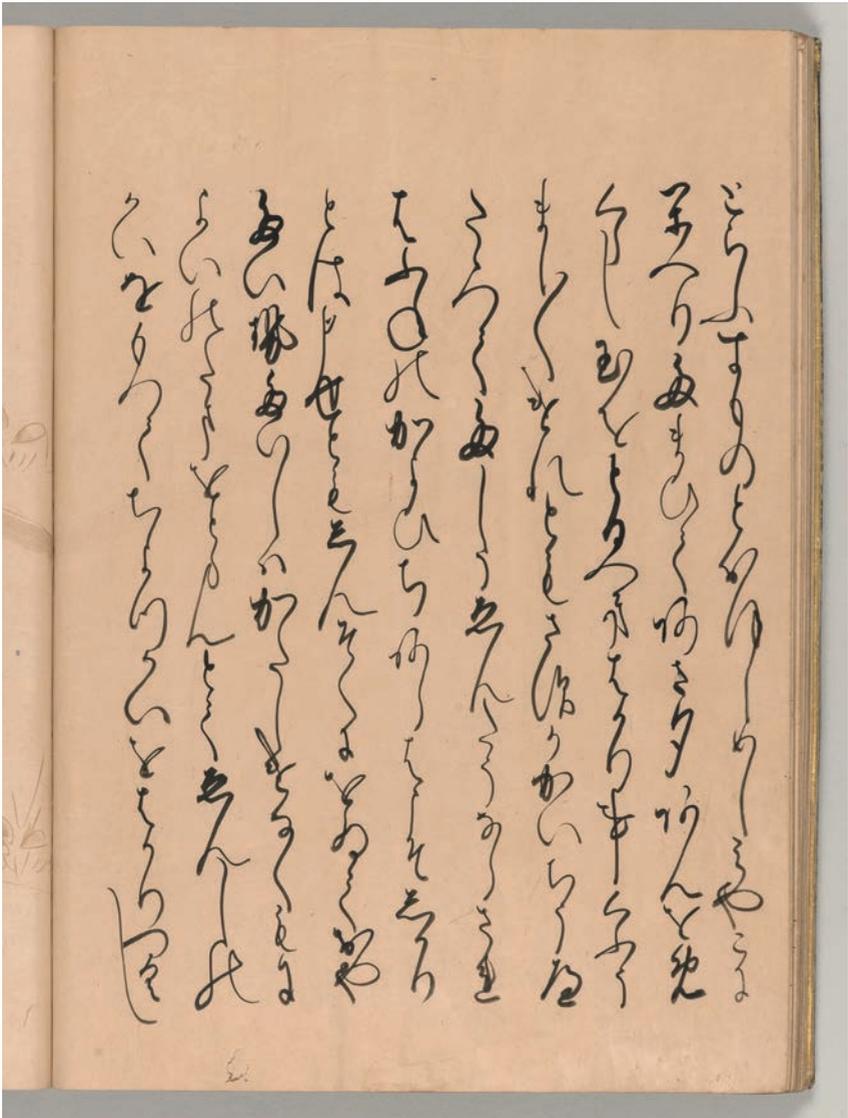
(二八オ)



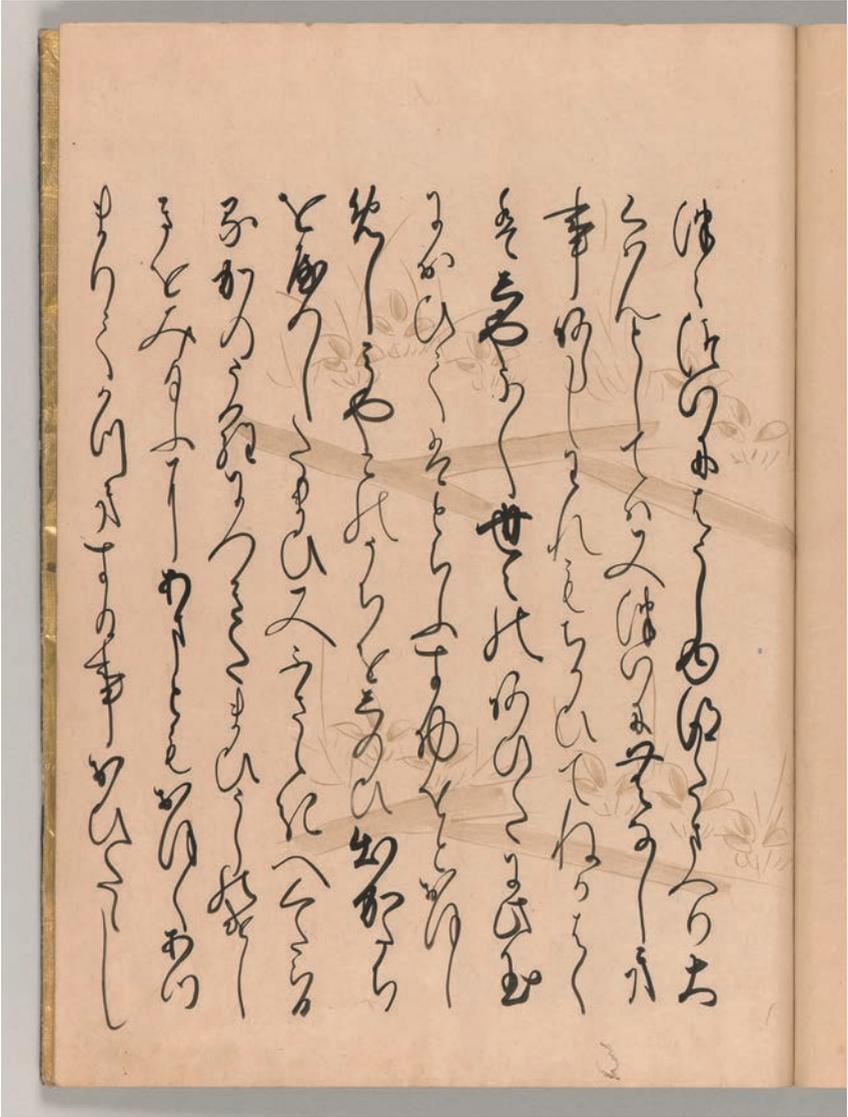
(二八ウ)



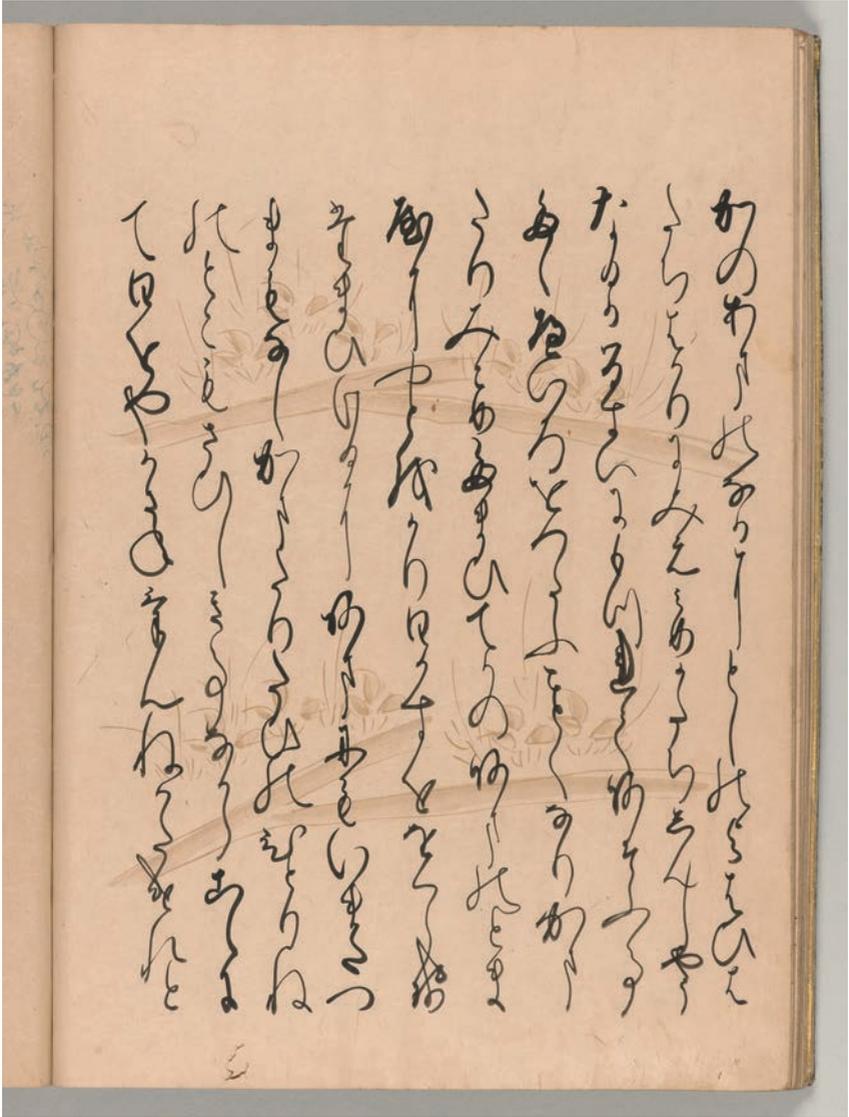
(二九才)



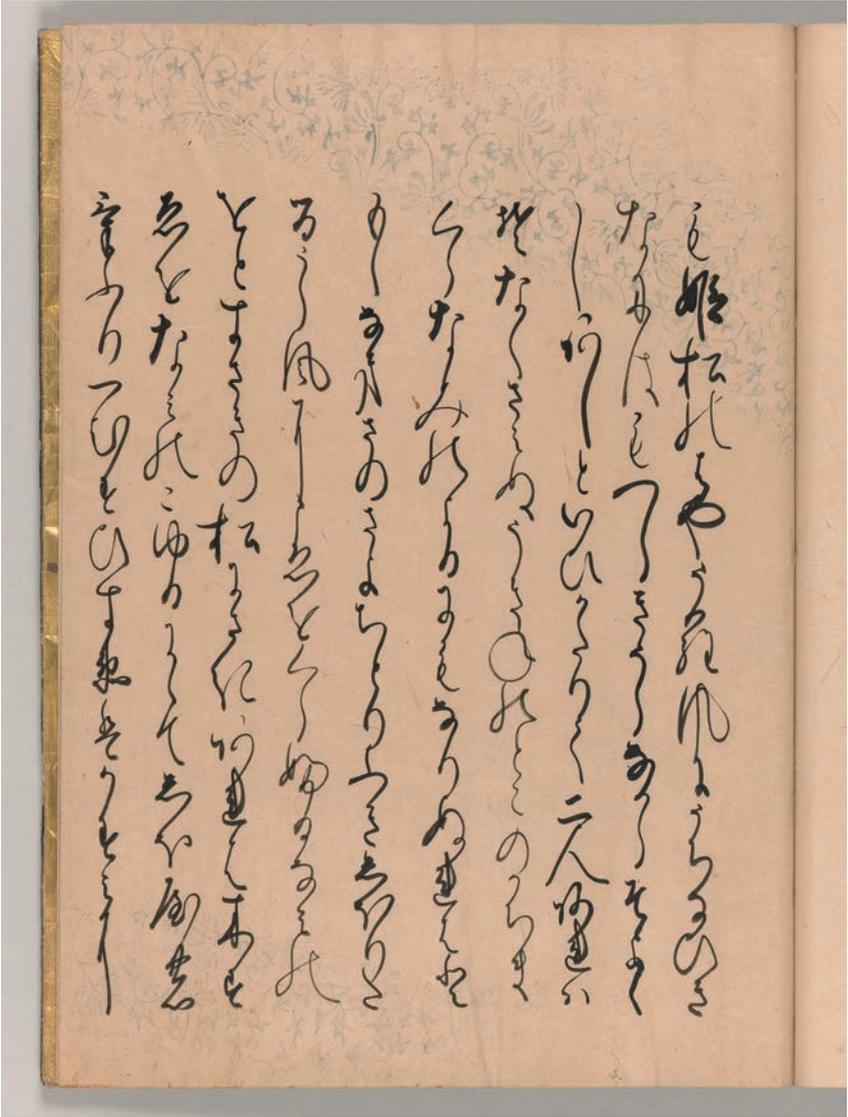
(二九ウ)



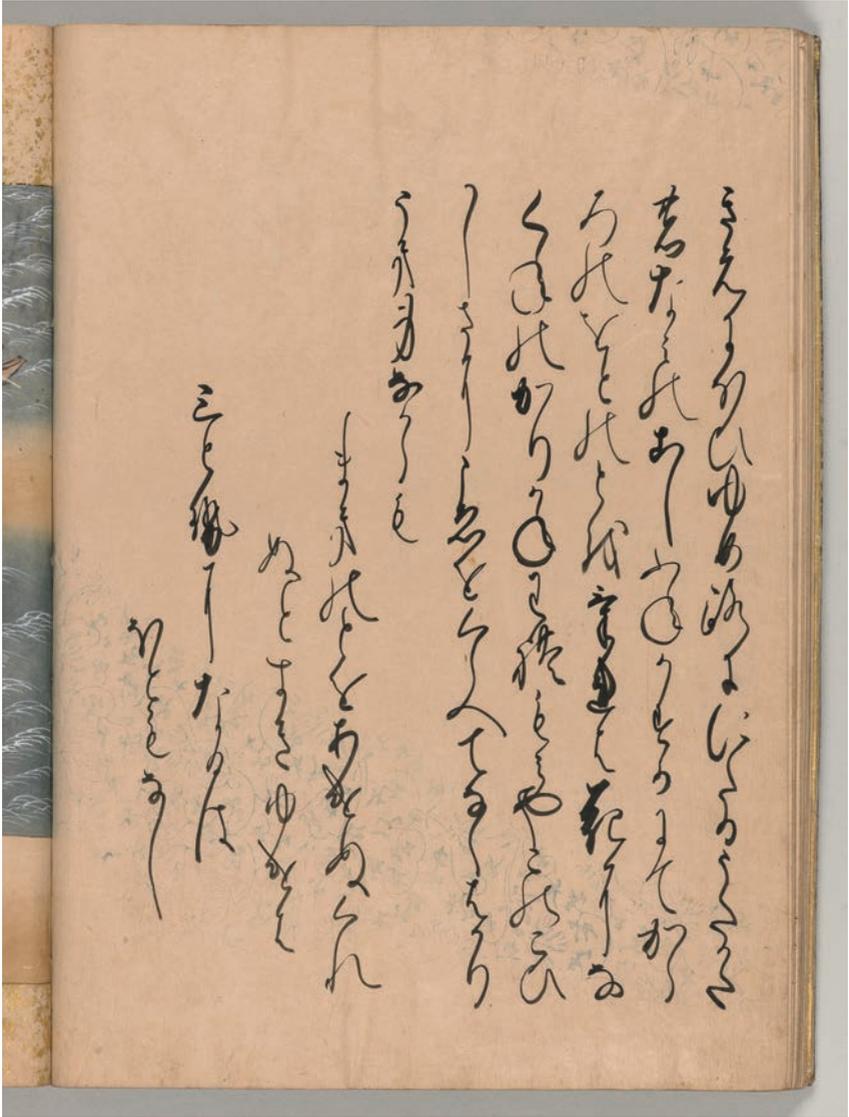
(三〇オ)



(三〇ウ)



(三一才)



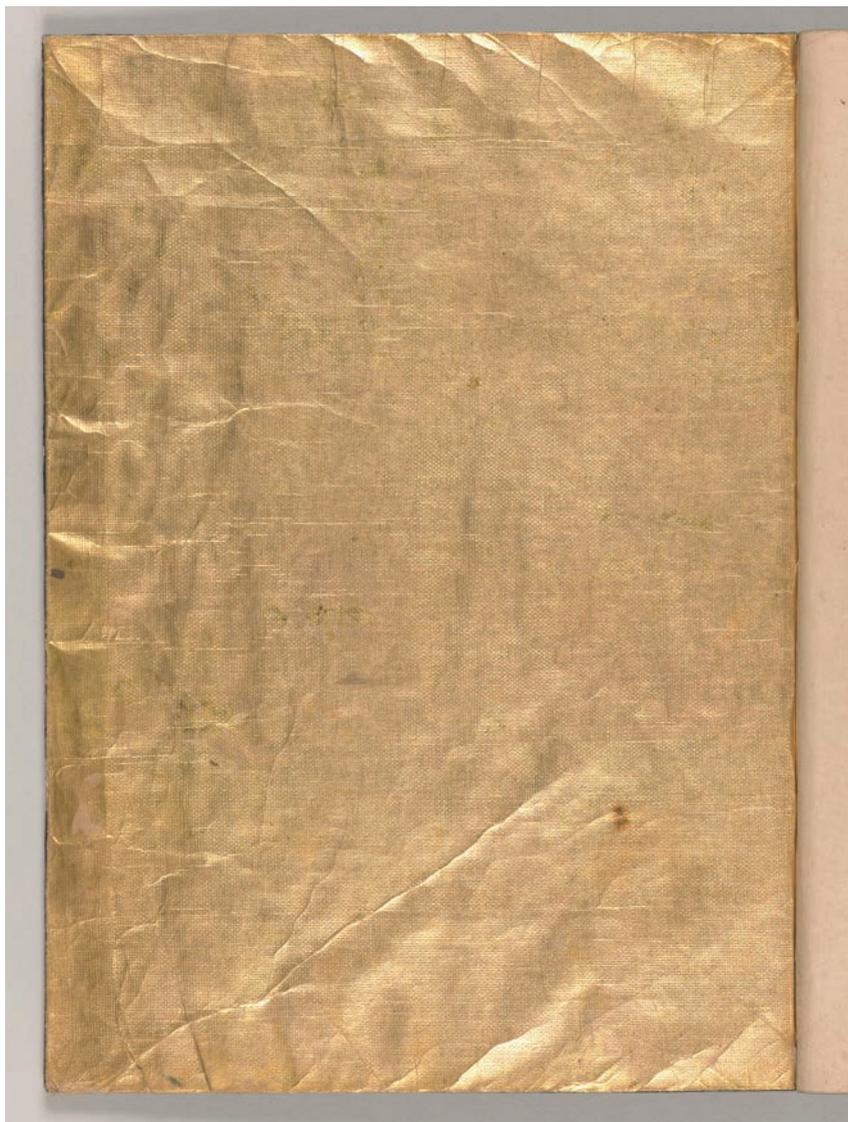
(三一ウ)



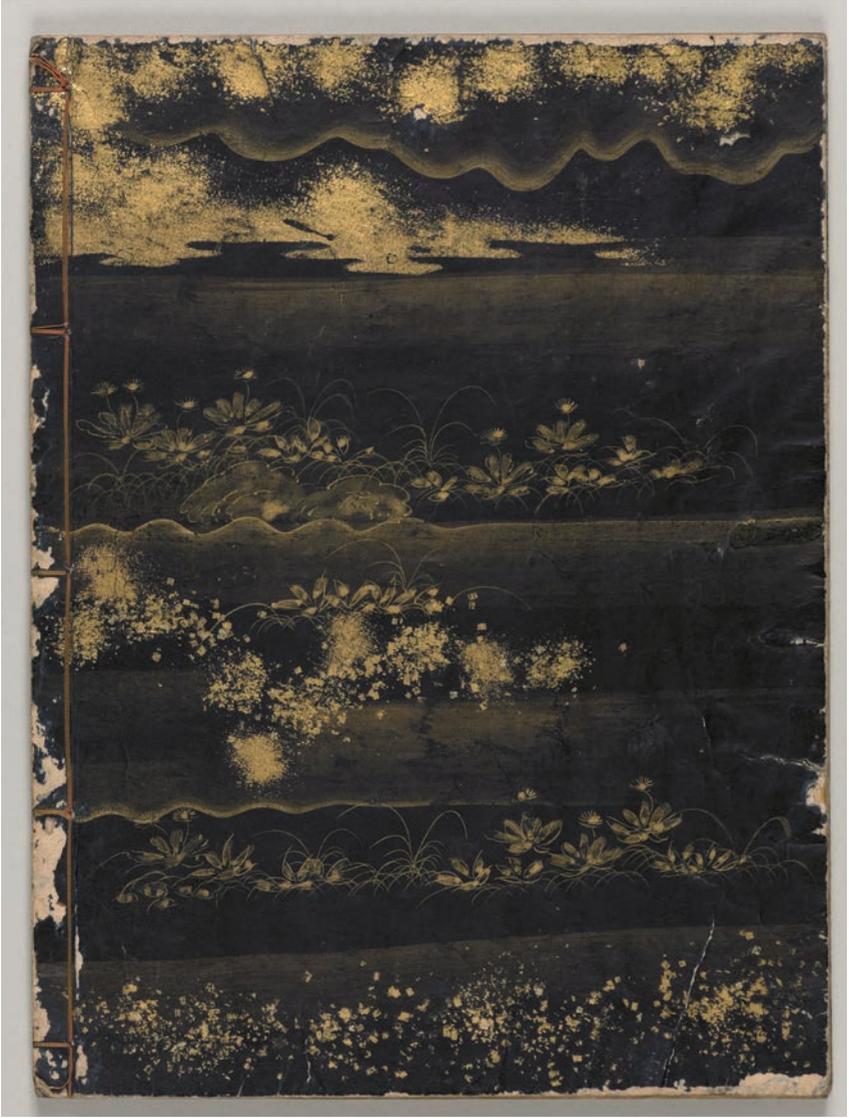
(三二オ)

かしそ男女れきくくくくくくくく
 若らるりくわりのきそれ行
 ふくふくふくくくくくくくくく
 とくくくくくくくくくくくくく
 みくくくくくくくくくくくくく
 りくくくくくくくくくくくくく
 かくくくくくくくくくくくくく
 おくくくくくくくくくくくくく
 かくくくくくくくくくくくくく
 とくくくくくくくくくくくくく

(三二ウ)



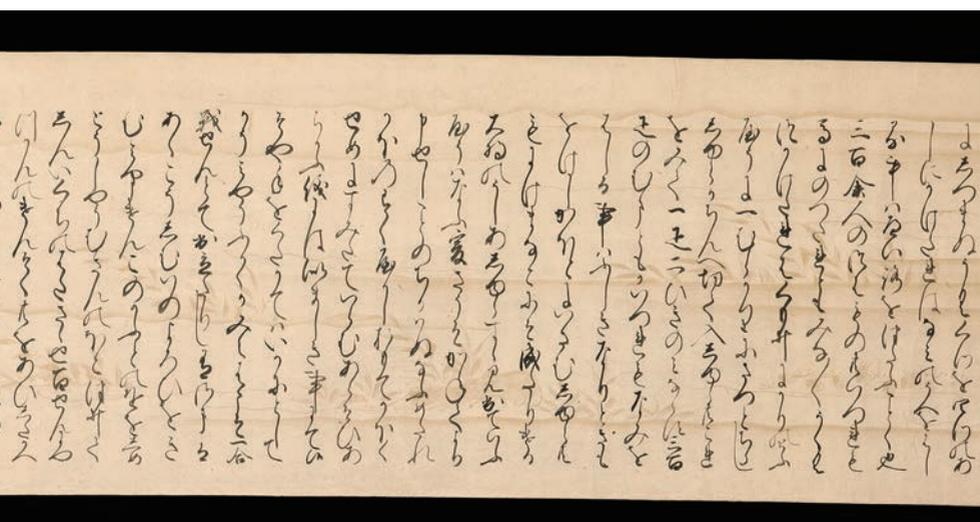
(中巻裏表紙見返し)



(中巻裏表紙)

卷子本『太しよくわん』中巻影印



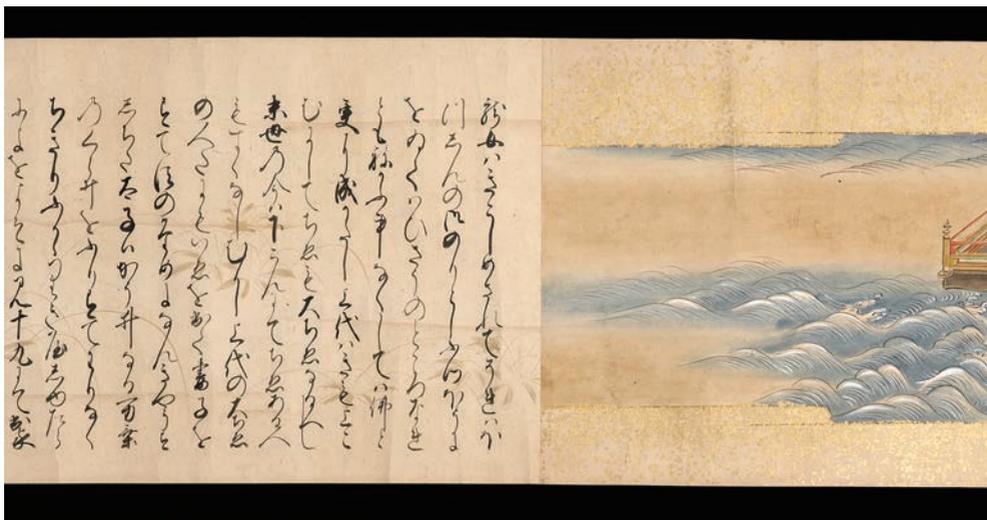


とつてんてははてしてつて
 てつてんてのまんなつた
 うつてのまんなつたつて
 ちんちん二百余りんけん
 とつてんてははてしてつて
 てつてんてのまんなつた
 うつてのまんなつたつて
 ちんちん二百余りんけん
 とつてんてははてしてつて
 てつてんてのまんなつた
 うつてのまんなつたつて
 ちんちん二百余りんけん
 とつてんてははてしてつて
 てつてんてのまんなつた
 うつてのまんなつたつて
 ちんちん二百余りんけん

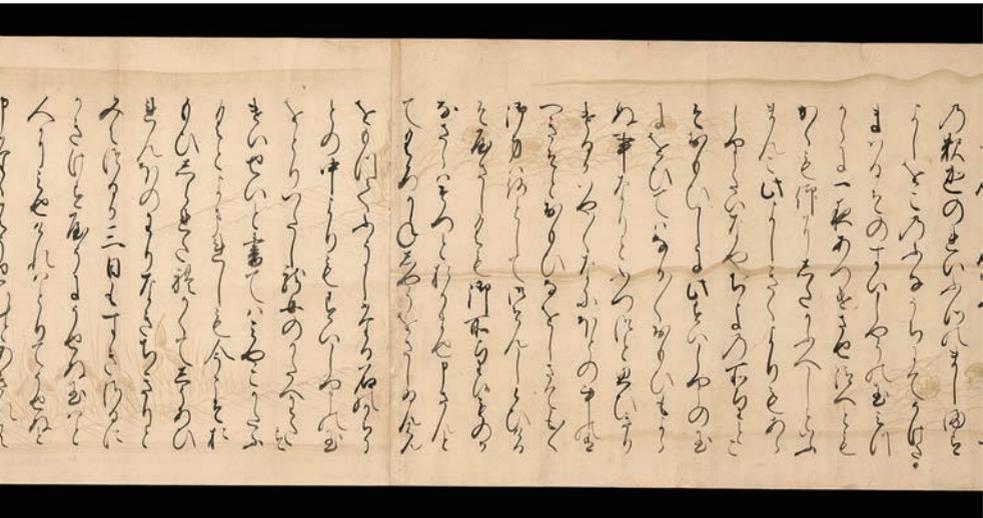
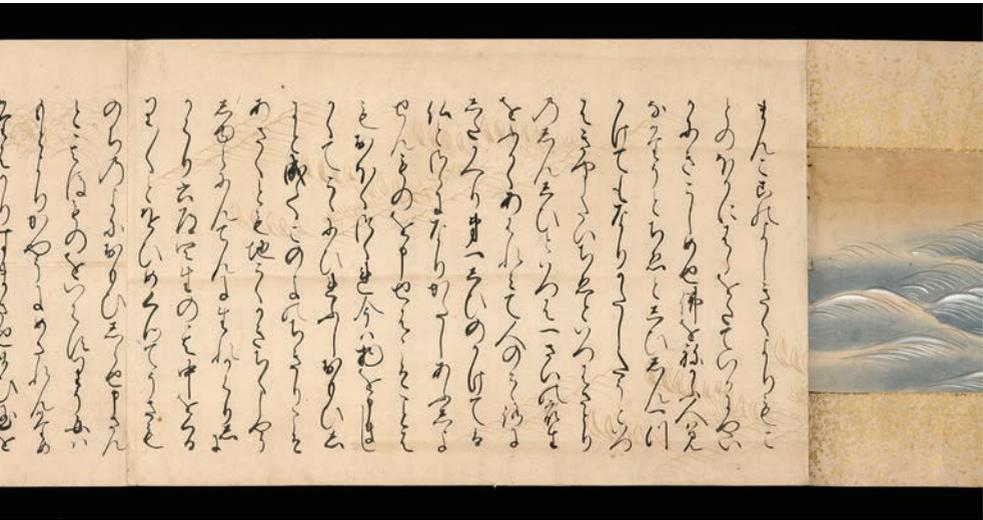
ちんちん二百余りんけん
 とつてんてははてしてつて
 てつてんてのまんなつた
 うつてのまんなつたつて
 ちんちん二百余りんけん
 とつてんてははてしてつて
 てつてんてのまんなつた
 うつてのまんなつたつて
 ちんちん二百余りんけん
 とつてんてははてしてつて
 てつてんてのまんなつた
 うつてのまんなつたつて
 ちんちん二百余りんけん
 とつてんてははてしてつて
 てつてんてのまんなつた
 うつてのまんなつたつて
 ちんちん二百余りんけん



しりまろなり生花もに
なれしと福もくは更もりや
とーやちりさるりらさ
せしりしりさるりらさ
とふさりんたつりしり
さるらぬりら一福んを
さく事とぬりらさるら
わとまらぬりらさるら
川和合のさるりらさるら
らんれはぬりらさるら
ゆららららららららら
さるらららららららら



新女ささるりらららら
けらぬぬりららららら
とわらららららららら
とも福うつりらららら
変り成りらららららら
じりてららららららら
未せりららららららら
とららららららららら
のららららららららら
とてはのらららららら
らららららららららら
らららららららららら
らららららららららら
らららららららららら





立正大学古書資料館蔵『大織冠』

冊子本（中卷）翻刻・注・校異

立正大学古書資料館蔵

『大織冠』冊子本（中巻）翻刻・注・校異

※冊子本と卷子本の書誌と、翻刻・注・校異の凡例は、本書上巻に掲載。

〈冊子本翻刻〉

太しよくはん 中
まんこ、これをみて、かなふへきや
うあらされは、ふなそこにつつと入
て、しやうそくをそきたりける。まん
子かその日のしやうそくには、しんつ
うゆけのうてかね、さはんやかんの
すねあてし、めうほうれんげのつなぬ
きはき、にんにくじひのよろいを草
すりなかにきくたして、あのかたら
さんみやく三ほたいの五まいかふと
をぬくひにき、しのひのおをそしめ
たりける。かうまりけんの大かたなを

「（題簽）

「（二才）

ま十もんじにさすまゝに、大たう
れんといふつるき、あしをなかにむす
んてさけ、けんみやうれんといふほ
こもつて、ふねのへいたにつつたちあ
かる。百よ人のつはものとも、おもひお
もひにいてたちて、はしふねおろし
おしうかへ、すてにかけんとしてりけり。
たうのいくきのならひにて、みたんに
かくる事はなし。てうしをとつてか
くをうつて、ひようしにあはせかけ
ひき、せいそろへのたいこは、らんし
よくしよつててうし、かけようつ
たいこは、さそうくとうつ也。ひけ
よとうつたいこは、おんてうこつと
つなり。くんてくひをとれとは、つるてう
こつとつなり。かなはぬときの時
には、しはうてつはうはなし、みたれ
ひようし、きりひやうし、きうにをよふ
ときには、ちをはたきとなかして

「（一ウ）

「（二才）

首 唐
 かうへをつるに詰めよとうつ。しゆらたう
 人 戦 昔 今 例
 しんのたゝかひは、むかしもいまもため
 上 修 戦
 しなし。そのうへ、しゆらかたゝかいに
 火 雨 降 患 風
 くはえんのあめをふらし、あくふうを
 吹 飛 警 石 降 飛
 ふきとはせ、はんしやくをふらす事
 散 劍 飛
 は、雪の花のちることく、つるきをと
 鋒 投 毒 放
 はせ、ほこをなげ、とくの矢をはなす
 真 砂 撒 芥 子 中
 事は、まなこをまくかことし。身を
 隠 思 時 芥 子 中
 かくさんとおもふとき、けしのなかへ
 分 入 現 比 現 時
 わけていり、あらはれんとおもふとき、
 須 弥 丈 比 現 時
 しゆみにもたけをくらふへし。かゝる
 神 通 名 誉 目 前 現 時
 しんつうめいよをまのまへにけん
 先 途 戦 勇
 し、こゝをせんとゝたゝかへは、すて
 唐 人 人 猛 勇
 にはやたうしん、心はたけくいさ
 勢 押 逃
 めとも、此いきほいにおされて、の
 万
 れかたくそ見えにける。さるあいた、ま
 戸 味 方 軍 兵
 んこはみかたのくんひやうともを
 近 付 叶
 ちかつけて、とてもかなはぬものならば、
 修 羅 特 底 水 屑
 しゆらか大しやう四五人、そののみくつ

「(二ウ)

異 國 然
 となしてこそ、いこくの聞へもしかる
 我 思 供 然
 へけれ。われとおもはん人々はともをし
 給 金 剛 界 受 茶 羅
 てたへやとて、こんかうかいのまんたら、
 胎 藏 界 受 茶 羅 両 界
 たいさうかいのまんたら、りやうかいの
 諸 尊 余 尊 受 茶 羅
 しょそん一千二百よそんのまんたら
 母 衣 掛 吹 反 船 底
 を、ほろに掛けてふきそらし、ふなそこ
 名 馬 名 數
 よりも、めいはとも、そのかすあまたひき
 出 万 戸 秘 藏 名 馬 引
 いたす。まんこかひさうのめいはに、じ
 通 輩 毛 名 付 寸
 んつうあしげとなつて、七き八
 分 明 歳 尾 髮 厚
 ふんあけ六さい、おかみあくまであつ
 うして、おつさまむかふよこはたはり、
 尾 口 承 燈 爪 根 横 端 張
 おくち、そうとう、つまねのくさり、しゝあ
 骨 並 夜 目 節 節 肉 合
 ひ、ほねなみ、よめのふし、あふ、つくりつ
 付 付 付
 けたることくなり。らんでんのくらは
 置 錫 江 錦 細 鞍 敷
 をき、しよつかうのにしきのうはしき、
 金 銀 塗 溜 璃 燈 證 上 敷
 こんくぬつたるりのあふみ、りきし
 力 革 猩 血
 ゆのちからかはをは、しやうくのちにて
 染 同 繫
 そめたりけり。
 おなしきおもかい

「(三ウ)

「(三オ)

を掛かけさせ

こ金かねの

「（四才）

く掛つわ

かんじと

か嘴ませ、

にし錦きの

た手つな

ゑ縫つてかけ、

ま万ん戸こゆらりと

うち乗のつて

な波みにし沈つまぬ

う浮く番つを、四つの「（四ウ）

あ足し掛にかけたれば、

な波みのうへを

は走しる事

は、へ平いろを

つた伝ふ

ことくなり。

「（五才）

（第六図）騎馬で切り込む運宗たち

「（六才）

三百余よ人にんのつ兵わものとも、いつれも

む馬まにのつたれとも、みな皆く浮うく

く香つかけたれば、くも雲る居にかりの

とふやうに、一む群らかりにさつと散ちらし、

し修ゆ羅らかちん陣へ切きつて入いる。し修ゆ羅らとも

これ是をみて、一ひ正き二ひ正きのみならず、

三百正ひ馬きのむまともか、いつれもなみ

をは走しる事はふ不し思きなりと、き肝も

を消けし、かほ勇と修にい羅さむし修ゆらとも

も、に透け眼まなこにそなりたりける。

たい大し將やう大のう大し阿あし修ゆら、す進み出

い言ひけるは、な愛ふ候こさうそ。かねて

より申せし事進のちか目はぬなふ。めたれ

かほ額のすく面やかし、おもてか額ほくせ目めに

すみ角たて、いら要ん争あらそひ、あら評か磯ふ磯ぎ

には、に似まし似き事碎にて候そや。手碎をく

たかては、い高か名にと不して、かう高みやう不ふ覚か

「（六ウ）

見合戦
くみえはこそ、一かつせんせん、とて出
立有様
たつたりしありさまは、あくこうしむ
患無明堅固
いのよらいをき、むみやうけんこのかふ
緒締開
とのおをしめ、とうじやうむさんのほ
願患痴旗
ついで、しんいくちのはたさゝせ、百せ
若千眷属
んにやつかんのけんそくともをあひ
従破
したかへ、しきりにときをつくれは、へ
天破
きてんやふれはしやうにおち、かい
底動動波上落海
ていをうこかしなみをあげ、こくうさ
動播
なからとうようして、月のひかりも
埋偏長夜
うつもれて、ひとへにちやうやとなり
たりけり。このほととにうけたまは
万戸将軍運宗
るまんこしやうくうんそうに、けん
参取
さんを取せん、といふまゝに、まん子をは
中籠
なかにとりこめたり。まんこかつわも
先途切
のとも、こゝをせんとゝきつたりけり。
羅阿修羅
らこあしゆら三百人、からこんらあし
ゆら五百人、手をくたいてそきつた
万戸名誉馬乗
りける。まんこはめいよのむまのり、

「(七才)

海
うみのうへにてのるたつな、さうかいふと
乗浮網滄海
りうかいふ、のりうかめたる馬のあし。ゆ
手者突時
んでのものをつくととき、あふきやう
手綱引馬手者
のたつなきつとひく、めてのものを
突時
つくとときに、ふきやうのむちをちやう
打透者者追時
とうつ。にくるものをおふとときには、せん
巧障泥鍔雜曲
きやうあをりのあふみのむちを、きよ
進退乘
くしんたいのつたりけり。にしから
ひかしへうつてとをるときには、三百よ人
東打打通時
かあとにつきて、こゝをせんとゝきつた
後付先途切
りけり。いれかへくたゝかへは、しゆら
入替戦
かいくさはこたれかゝつて、かなふつへし
戦
とも見えさりけり。そう大将のまけい
首羅
しゆら、八めんはつ臂振立
したのほこをうちふり、うちしにこゝ也
舌鋒
と、おめきさけんてかけにけり。まん
戸喚叫
こ、是をみて、かなふへきやうあらさ
見叶
れは、うしほをむすひてうづとして、
潮深折警
しよてんにふかくきせいする。しかるへく

「(八才)

「(七ウ)

「(八ウ)

は、くはんせをん、ひくはんたかへたまふな。
観世音悲願遠給

ふひくくんしんちう、ねひくはんをんりき、し
怖畏軍陣中念彼観音力衆

おんしつたいさん。ちかいいまならては、
怨悉退散誓誓今

しゆらかおそるゝけまんのはたを、たゝ
修羅恐華鬘

さしかけよ。いや、さしかけよと、けちす
差掛懸下知（九才）

れは、けまらんはう玉のはたをま
先差華鬘驚鳳真

つさきにさゝせ、われをとらしとせ
先差我劣

めかゝる。まんこかつはものかつにのり
追伏万戸兵勝乗

て、をつふせくきつたりけり。しんり
尽果通力飛行叶

きもつきはて、つうりきひきやうもか
底水肩

なはずし、そのみくつとなりけり。
生残修羅住家

いきのこるしゆらとも、すみかゝにかく
万戸勝関作

れたり。まんこかちときつくりかけ、もと
船乗乘

のふねにとりのり、しゆらたうしんの
戦勝勝

たゝかひに、かちぬやくと、いさみをなし、（九ウ）
唐土高麗走過本近

たうと、かうらいはしりすぎ、日ほんち
唐土高麗走過本近

かふそなりにける。さるあいた、りうわう
唐土高麗走過本近

たち、これをは、さていかゝはせんと、せ
識

んきせられけり。その中にとつても、

なんたりうわうのたまはく、それにん
難陀竜王宜

けんのちゑをたはからんには、みめよき
問智慧謀謀見目

をんなによもしかし。こゝをもつてあ
女女

んするに、りうによをもつて、このたま
竜女

をたはかつてとるへきなり。りうくう
謀取竜宮

のをと姫に、こひさいによと申て、
乙（二〇才）

ならひなきひじんたりしを、みめいつく
並飾立美人

しくかさりたて、うつほふねにつくり
籠波立空舟上

こめ、なみのうへにをしあくる。これをは
知万戸上

しらて、まんこ、しゆんふうにほをあけて、
心任吹風行帆上

こゝろにまかせてふかせゆくに、かいま
心任吹風行帆上

んくとしては、又はしやうちゝむたり。
碧天沖

へきてんのおきぬく風、くはうくとし
碧天沖

ては、又いつれのほくさうにかこゑやと
大頭河原声宿

さん。かしらなし、おほかはら、きとのしま、
諸見島島蘆摩

もろみのしま、もめい島、さつまのくにゝ（二〇ウ）
鬼界島志岐

きかいかしま、ゆきのもとなり、つしまの
内院事故

ない、ことゆへなくはしりすぎ、九国
内院事故

の地をはゆん手にみて、さぬきのくに
弓見

に聞へたる、ふさ^房き^崎のおき^沖をと^通り

けり。な^流かれ木^本一^浮ほ^本ん^本う^本かん^本て^本あり。す^水い

し^手ゆ、か^掛ち^取とり、こ^見れ^見を^見み^見て、此^程ほ^大との^大たい

ふう^風に、て^天ん^竺ち^唐く^土た^土う^土との^沈ち^香ん^香か^香う^香は^香し、

ふ^吹か^流れて^流な^流か^流る^流ゝや^流ら^流ん^流と、人^怪々^怪あ^怪や^怪し

め^万たり^戸けれ^由は、ま^開ん^開子^開、此^上よ^上し^上き^上く^上よ^上り

も、なん^何の^怪あ^怪や^怪し^怪め^怪事^怪そ。た^取ゝ^取と^取り^取あ^取り

け^下よ^知と、け^下ち^知を^知な^知す。御^詔で^詔う^詔に^詔し^詔た^詔か^詔い、

は^端し^舟ふ^降ね^降お^取ろ^取し^取と^取り^取み^取る^取に、ち^沈ん^香か^香う

にて^何は^何な^何し。あ^怪や^怪し^怪や。わ^割つ^割て^割み^割よ^割と^割て、

此^割木^割を^割わ^割つ^割て^割み^割る^割に、な^何に^何と^何こ^何と^何は^何に

の^述へ^難か^難た^難き^難ひ^美し^人ん^人一^人人^人お^人は^人し^人ま^人す。す^水い

し^手ゆ、か^掛ん^掛と^掛り、こ^見れ^見を^見み^見て、を^斧の^斧、ま^鉞さ^鉞か^鉞り

を^投な^投け

す^捨て

あ^捨つ^捨と^捨は^捨か^捨り

申^申ける。 「(一一ウ)」

(第七回 こひさい女の出現)

「(一二オ)」

ま^万ん^戸こ、此^由よ^見し^見み^見る^見よ^見り^見も、い^如か^何さ^難ま^難に^難も

御^天身^魔は^波て^旬ん^旬ま^旬は^旬し^旬ゆ^旬ん^旬の^旬け^旬けん^旬に

て、し^障や^碍う^碍け^碍を^碍な^碍さ^碍ん^碍そ^碍の^碍た^碍め^碍な^碍。あ^怪や^怪

し^言や、い^言か^言に^言と、い^言ひ^言け^言れ^言と、な^何に^何と^何も^何の^物

を^言は^言い^言は^言す^言し^言て、た^只ゝ^只な^只み^只た^只く^只み^只た^只る

は^万か^戸り^重なり。ま^重ん^重こ、か^言さ^言ね^言て^言い^言ひ^言け^言る^言は^言、

い^何や、な^何に^何と^何た^何る^何ま^何せ^何た^何ま^何ふ^何と^何も、せ^是ひ^非

に^付つ^付け^付て^付お^覺ほ^東つ^東か^東な^東し。た^只ゝ^只か^只い^只て^只い^只に

し^沈つ^水め、み^水く^水つ^水に^水な^水せ^水と、い^勇さ^勇み^勇を^勇な^勇せ^勇は^勇、

あ^荒ら^荒け^荒な^荒き^荒つ^荒わ^兵もの^兵、御^電手^電に^電す^電か^電り^電て、 「(一二ウ)」

う^海み^入へ^入い^入れ^入ん^入と^入す。り^電う^電女^電は^電い^電と^電ゝあ^電こ

か^伏れて、あ^根ら、う^根ら^根め^根し^根の^根人^根の^根こ^根と^根は^根や。野^葉

に^伏ふ^伏し、山^伏を^伏家^伏と^伏す、こ^虎ら^狼う^野や^千か^干ん^干の^干た^類く

い^有た^有に^有も、な^情さ^情け^情は^情あ^情り^情と^情こ^情そ^情き^情け。み^自つ^自か

ら^自と^自申^自は、け^契い^丹たん^丹こ^丹く^丹の^丹大^王わ^王う^王の^王、い^自つ

き^候の^候姫^候に^候て^候さ^候ふ^候ら^候ふ^候な^候るか、あ^后る^后き^后さ^后き

の^識さん^識に^識よ^識り、う^空つ^舟ほ^舟ふ^舟ね^舟に^舟つ^舟く^舟り^舟こ^舟め、

さうはまんりへなかさるゝ。たまゝき

とくふしきにしんりんにあいたれば、

さりともとこそおもひしに、なにのつ

みに、うきかいていにしつむへきそ。うらめし

さよと、かきとく。みたれかみをつたい

て、なみたの露のこほるゝは、つらぬく

たまのことくなり。しもをおひたるをみ

なへし、した葉しほるゝふせいし、せい

しかやさうにすてられて、ひしきもの

にはそてしぬれ、ほす日もなしと、

わひけるも、いまこそおもひしられたり。

かつらをかきしまゆすみ、はちすをふく

むくちひる、もゝのこひますあいきやう、

なみとなみたにうちぬれ、ものおもふ人

のふせいかや。うちむつけたる御あり

さま、よそのみるめもいたはしや。さしも

かしこきまんことは申せとも、やかてたる

まかされ、けにゝそれはさそあるらん。

それゝとうせん申せとて、おなしふねに

のする。りうくうのわさなれば、むかふさま

に風ふきて、ふさ崎のおきに十日はか

りとうりうす。さなきたに、りよはく

はことに物うきに、まんこあまりに

たへかねて、風のたよりにかよひきて、い

ねかりそめのうたゝねは、なにとなるこの

をとたかく、世にもすゝめのすみうきに、

おとろかさんかいたはしきに、あふきの

かせをいさめつゝ、月てうさんにかくれ

ぬれば、あふきをあけてこれをたと

へ、かせたいきよにやみぬれば、木をうこ

かしてこれをおしゆ。あひみる人をこふ

るには、ふみかよはねとこふるならひ、き

みかこゝろをとりにくる。なふ、いかにゝ

と、おとろかす。りう女はもとよりねもいら

す。さりなから、うたゝねいりたるふせいに

て、たそや、夢みるおりからに、うつゝとも

なきことの葉は、ゆめのうき世のあた

なれば、人のことはもたのまれます。よ

のまにかはるあすかゝは、みつほのあは
のかりそめに、風にきえぬることのはの、
すゑもとをらぬ物ゆへに、あたま

たちてはなにかせん。なか／＼人には、
はしめよりとはれぬは、うらみあらはこ
そ。そのうへ、われは生れてより此かた、
かいもんをあやまたす、むしよりいま
にいたるまで、おほくの生をうけし事、
あるひは六よく四しやうにむまれ、ごす
八くのくをうけ、あるひは三つしやくに
おち、したいもつ火にあへり。かゝるさ
いこうをふり、いまにけんともまるゝこ
とも、かいらきによつてなり。たい一せつ
しやうかいをたもつては、しんのさうと成。
ちうたうかいをたもつて、かんのさうと
なる。しやあんかいをたもつて、ひのさう
となる。まうこかいをたもつて、はいの
さうとなる。おんしゆかいをたもつては、
しんのさうとこれなる。これに五をんし

つせいあり。いはゆるきうせうかくちう、
そうわうひやうはんいちこつ、これ又みめ
うの御のりとし、こちのおんせいこれなり。
これに五つのたましゐあり。こんしはく
いしんなりき。此五つのかたちをくそく
するを、仏と申。五つのかたちかけぬれば、
くちあんへのちくるいたり。いかにほとけ
をねんする人は、まつ五かいをよくたも
つへし。ひとつもかいをやふりなは、む
そくたそくのものとなりて、なかくほと
けになるまし。おほせはおもくさふらへ
と、第三のかいもんを、いかにしてやふら
んと、なみたくみたるはかりにて、おもひ入
てそおはしける。まんこもたいとうそ
たち、ふつほうるふのくになれば、あら／＼
かたり申。あら、しゆせうや。さては後生」(一六ウ)

か。そのかいもんのなかに、六はらみつ
のきやうあり。その中にとつても、にん

辱^破はらみつとは、人のこゝろをやふ^破
 らす。いかに五かいをたもつても、人のこゝ^心
 ろをやふりなは、ほとけとさらになりかた^難
 し。されはにや、ほとけには三めうろく^六
 つうおはします。これはひとへにくわこ^通
 にして、しよはらみつをきやうせし^{諸波羅蜜蜜修行功}
 とく、いまにあらはれて、ほとけとなり^{徳今現程度灌漑水}
 たまへり。たとい一たひはたきのみつ、に^{給澄}
 こりてすまぬ物なりと、ついにはすみ^清
 てきよからん。こひには人のしなぬか。^{恋死}
 さいもむなくこひしなは、一ねん五^空
 百しやう、けんねんむりやうこう、しやう^生
 く^々世々のあひたにつきせぬうらみの^間
 ふかくして、ともにしやしんとなるなら^深
 は、ほとけとはならずして、しやたうに^仏
 なかくおつへし。かいのしな、あまたあり^水
 五かいをよくたもつては、にんけん^戒とむ^生
 まれて五たいをうくるなり。十かいをた^戒
 もつては、てんにんとむまれて、五す^天

「(二七ウ)

いをうくるなり。二百五十かいは、又しや^受
 うもんとむまれて、ほとけにはなりか^聞
 たし。五百かいをたもつては、ゑんかく^戒
 とこれなる。これもほとけにならず。ほさ^三
 つさんしゆ一しんかい、此かいをたもつて、^聚
 やかてほさつとなりつゝ、ほとけとさら^{善薩}
 になりかたし。大せうゑんとんかい、この^心
 かいをたもつては、やかてほとけに成^戒
 なり。大せうのかいきやうは、二ねんを^乘
 つかぬかいなり。しんたいはむさうにて、^戒
 わか身本よりしくうなり。しやうし^我
 にもつなかれず、ねはんにもさらに^擊
 ちうせす。しやしやうすなはちきよ^住
 ければ、すゝくへきあかもなし。いとふ^濯
 へきほんなうなし。ねかひてきたるほと^煩
 けなし。みる一ねんをほうとし、きく^見
 事を御のりとす。こゝをしらぬをま^法
 よひとす。めんやうふたつにわかうの^道
 みち、いもせふうふのなからへ、これふ^妹

「(二八ウ)

つはうのみなもと、おろかにおもふへからず。御なひきあれやとそ

おもふ。いかに

くんと申

ける。

「(一九オ)

(第八図 語り合う運宗とこひさい女)

りう女は聞しめされて、それは

ほつしんの御のりとし、ふつほうに

おめては、ひさうの所なれとも、ね

かふ事なくしては、ほとけとさらになり

かたし。上代はきも上こんにして、

ちゑも大ちゑなるへし。まつ世の

いまは下こんにて、ちゑある人もすく

なし。むかし上代の大ちゑの人たに

も、いへをいてくさいしをすて、のりの

ためになんきやうす。しちたたい

しは、かうあなる万ぜうのくらあ

「(二〇オ)

「(一九ウ)

をふりすて、わりなくちきりふかゝり

しやしゆたらによをよそにみて、

十九にてしゆつけをとけ、たんどく

せんのほうれい、あらせんんにを師

とたのみ、わしみ山のれいほうに、

たき木をこり、身をこかし、せんこく

にむすふあかの水、こほりのひま

をくむたひに、なんたの袖のつらゝ

となる。よるは又夜もすから、せん人の

ゆかのうへにし、させんのとこのふと

んとなり、かゝるしんくのこうをつみ、

まさしくしやかとほとけとなりた

まひ、三かいのとくそん、ししやうの

ゑことましくて、一大しやうけうをと

きひろめ給ふなり。こゝをもつてあむ

するに、ほんなうそくほたいしん、しや

うしそくねはんとて、さいしをたいし

さふらひて、ほとけとやすくなるならば、

「(二一オ)

「(二〇ウ)

らゐをふりすてゝ、きさきをいとひた振捨まひけり。そのほか外証しよくはのらか羅漢んたち、いづれかさいしをたいして、
 ほとけ仏となりし人である。さても仏の御をとゝ、弟難陀太子なんたたいしと申せしは、習氣煩惱しつげほんなうつきすして、女にんをこのみ給いしを、かくてはほとけ人好にならしとて、ほとけ、はうへんをめぐらして、巡しやうとちこくをありさまを、即身そくしんにみせたてまつりて、遂出家ついにしゆつけとけさせて、難陀比丘なんたひくとそなし給ふ。いとゝこのむしやきやうを、邪行よしとおしへたまふは、首目まうもくにあしきみちおしゆる風情ふせいなるへし。かやうに申せはとて、もとより我はほとけにてあるなり。
虚空こくうししやうとう一たい。同体かしらはや師くし、耳鼻みゝはなはあみた、阿弥陀胸むねはみろく、服はらはしやか、釈迦腰こしは大日によらい如来

「(二二ウ)

なり。そのほか十ほうのしよふつたち、諸もろくのほさつとし、我わかたいに具足くそくして、ほうのこくうにほうによとしておはします。来きたりもせず、去さりもせず、いづもたへせすましますを、法ほつしんふつと申。かたちをつくりあらはし、現しやうとをたてゝすみかとし給ふを、報ほうしんふつと申なり。
 八さうしやうたうし給ひてほうを相成と、すなはちしゆしやうをりやくし給たまふを、即心おうしんふつと申なり。
三さんしんをとりわき、悟しんをしんするは、悟さとのまへのほとけなり。
三しん一そくとくはんし、即いづれをもしんするを、悟さとのまへと申。ほとけとならんそのため、難なんきやう苦うきやうせんもの、善いかでぜんあく惡みたるへき。身はいたつらになさるゝと

「(二二オ)

「(二二ウ)

かなふまし^叶

とそ仰ける。|(二三オ)

(第九図 こひさい女に取り残された運宗)

|(二三ウ)

まん^万こ、此^由よしき^開よりも、こと^殊の外^外ほかに^立はらを^腹たて、いかに^聞やく^聞聞しめせ。ほ^召と^仏けを^願ねか^道ふ人は^皆みな、たう^道とち^智ゑと^恵じ^慈ひ^悲しん、一つ^心かけても^欠な^行りか^難たし。たう^道とい^言つは^言きやう^行たい、ち^体ち^衆ゑとい^言つは^悟さと^心りの^心しん、し^言ひと^言いつは^言一^切さいの^衆しゆ^生しやう^深を^機ふか^機くあ^機は^機れ^機み^機て、人^切の^衆心^生にした^深か^機へり。第一^機し^機ひの^機か^機けては、ほ^仏と^更けと^更さらに^難成^難か^難たし。あ^言ふ、し^所よ^詮せん^詮もの^葉を^葉申^葉せは^葉こそ、こと^言はも^言お^多ほ^多く^作つく^今れ、いま^今は^死もの^死を^死申^死まし。か^死くて^死こゝに^死ひ^伏れ^伏ふ^伏し、おも^思ひ^思し^思し^思にて^思なり^思て、此^世よ^世の^契ち^契き^契り^契こそ^契あ^契さ^契く^契と^契も、ち^地こ^獄く、か^餓き、ち^畜く^畜し^畜やう、し^生ゆ^生ら、人^修、

|(二四オ)

てんに、む^生まれ^生か^生はり、し^死にか^死はり、六^道たう^道

四^生しやう^生の^生その^生中^生を、く^巡る^巡り^巡く^巡と

お^追い^追め^追く^追つ^追て、う^憂さ^憂も^憂つ^憂ら^憂さ^憂もの^憂ち^憂の^憂

世^思に、おも^思ひ^思し^思ら^思せ^思申^思さん^思と、そ^知の^知ち^知

もの^言を^言い^言は^言す。り^電う^電女^電は^電も^電と^電よ^電り^電か^電や

う^召に^召め^召され^召ん^召た^召め、た^謀は^謀かり^謀す^謀ま^謀さ^謀せ

給^万ひ、玉^万を^万の^万へ^万た^万る^万御^万手^万に^万て、ま^万ん^万こ

か^袂た^袂も^袂と^袂を^袂ひ^袂か^袂へ^袂さ^袂せ^袂た^袂ま^袂ひ、な^袂ふ、

い^恨た^恨う^恨な^恨う^恨ら^恨み^恨た^恨ま^恨ひ^恨そ^恨よ。ま^真こと

に^自心^自さ^自し^自の^自ま^自し^自ま^自さ^自は、み^自つ^自か^自ら^自か

し^所よ^望も^望う^望を^望か^望な^望へ^望て^望た^望へ。草^枕の^枕ま^枕く^枕ら

の^情う^情た^情ゝ^情ね^情の^情、露^情の^情な^情さ^情け^情は^情ゆ^情め

は^万かり^万ち^万き^万り^万なん。ま^万ん^万こ、あ^万ま^万り^万の

う^婦れ^婦し^婦さ^婦に、か^婦つ^婦は^婦と^婦お^婦き^婦あ^婦かり^婦て

身^抱を^抱い^抱た^抱き、な^抱ふ、こ^抱は^抱ま^抱こと^抱にて^抱御

座^二候^二か。ふ^二た^二つ^二と^二な^二き^二い^二の^二ち^二を^二も^二ま

いら^命せ^命ん^命と^命申^命。り^命う^命に^命よ^命は^命聞^命し^命め^命さ

れて、い^召や、そ^召れ^召ま^召て^召も^召さ^召ふ^召ら^召は^召す。け^召

に^赤や^赤らん、う^赤け^赤た^赤ま^赤は^赤れ^赤は、し^赤やく^赤せ

|(二五オ)

檀檀御衣木御衣木んたんのみそきにて、五すん寸のしや
か迦のれいふつ仏の、まします由よしをこ

のふなうち船内にてうけたまはる。そのす水

いしやう晶のたま玉、みつ自からに一夜あつ預

けさせ給へ。ともかくもおほせ仰したか從

ふへし、といふ。まん万こ、此よし由きくよ聞

りも、あら、せう正たいなや。ぢよ自の所余

望玉とこそおもひしに、此すいしやう水

のたま玉にをいては、なか何くおもひも思

よらぬ事なりと、ふつとおもひきり寄

けるか、いや何く何なほ程との事切の

あるへきそと、おもひ思なを直し、さても存

く、御身何はな何として御存んし知

候所いけるそ。やさしくも御望しよもう

候ものかな。さらは、そつとおかませ申押

さん鉄とて、くろかねしやう錠をさし、ゐ印

んはん判をもつてふう封したる、いし石

から唐うとの中鑑よりも、すいしやう水晶の

玉取をとり出いたし、りう竜によ女のかた方へはた渡

「(二六オ)

「(二五ウ)

す。けいせい傾とかき書ては、みやこ都かたふ傾

くとよまれしも、いま今こそおもひし思

られたれ。かくて、しうあい執れん恋ほ慕の

わりなき契ちきり見とみえつるか、三日

もすき過さるに、かき種けすやうに消

うせぬ。玉はと人見にみせければ、

とり取てうせぬと申。た失はうせん茫

とあき果れば果て、こくう虚に手空をこそ

たん拱たくすれ。あら口くちおしや。り竜

うくう宮のみや都こより、た謀はかりけるを

しらす知して、とられ取ける事無のむね念

さよ。さり残なから、とかふ申及にをよ急はす

とて、の先こるたから宝をさ先きとして、い急そ

きみや都こ上にのほり、さま宝く上のはう

ふつ物をとり取いたして、たい大し織よくはん冠

にまい参らせ上あく上る。たい大し織よくはん冠

は御覽らんして、を送くりふみ文の中そのな

かに、たい第一のた宝から物のもの、すいし水晶

やう見の玉見のみえ

「(二七オ)

「(二六ウ)

ぬはいかにと、
たつね尋といたまふ給。

つゝむ包へきにて

あらされは、

ありのまゝ

に申

上
あくる。

「(二七ウ)

(第一〇四) 運宗、宝物を大織冠に献上する)

「(二八オ)

かまたり鎌、聞しめされて、あまりに
おもへはむね無念なるに、せめてわれ
を具足そくし、そのうらのありさまを
みせよとおほせければ、うけたまはる
と申て、もとのふね船にのせ申、ふさ
さきのおさへ崎をして、こゝなりと申。
たゝはう茫くとしたるなみのうへを御
らんして、む空なしくもとり給ふ。みち
すから、おほしめす召。さもあれ、むね無念

んなるものかな。さん三こく一国のてう重

ほうを、わ我かてう朝のたからとはなさず

して、いたつら電にりう宮くう宝のたからと

なしけん口おし惜さよ。よくく物を

あんするに、りう電くう宮かいは六たう道に

をいても、ちく畜しやう生たう道のうち、に

んけん問のちゑ智にははるかにを劣と

るへき物を。さあらん時ときは、な何にと

してたは謀かられけん不ふしきさよ。

われ又せん善けう巧ほう方へんし、いかにも

あんをめぐらし、このたま玉にをひては、

とらふすものとおほしめ召し、みや都こ都に

かへりたまひて、あさ夕あん案をめぐ

くらし、玉をとるへきはかり事工、くふう夫

ましくく中けれとも、さすか海かい島ちう隔へ

たゝつて、たしう他ゑん州たう遠ならされ

は、ふね船のかよ通ち路あらはこそ。しかり然

とは申せとも、しん神そく足にをゐておや。

たいせ大たい施しはかたしけなくも、に如

「(二八ウ)

「(二九オ)

よいのたまをとらんとて、ゑんしの
かいをもつてちよつかいをはかりつくし
つゝ、ついにはうしゆ、得たまへり。大
くはんとしては、又ついにむなしき
事あらし。われもちかひて、ねかはく
は、しやうく世々のあひたに、此玉
におひてはとらふす物とおほし
めし、みやこのうちをしのひ出、かたち
をやつしたまひ、又ふさきへくたたる
る。かのうらにつきたまひ、うらのけし
きを見給ふに、あまともおほくあつ
まりて、かつきする事おひたし。
かのあまのなかに、としのよはひ、は
たちはかりにみえ、みめかたちしんしやう
なるか、るすいにもつれてあそふ事、
たへいろをつたふことくなり。かま
たり、みこめたまひて、かのあまのとま
屋にやとをかり、日かすををくらせ
たまひけるに、あまにもいまたつ

「(二九ウ)

まもなし。かまたり、たひのひとりね
のともさひしき事なから、こゝに
て日をやかさねけん。ねかたけれと
も姫松の、はやうら風にうちなひき、
なにはもつらきうらなから、そよ、
しあしといひかたりて、二人あれば
そなくさみぬ。うきねのこのかちま
くら、なみのよるにもなりぬれば、と
もななきのさよちとり、ふきしほりた
るうら風に、こゑをくらふるなみの
をと、すさきの松にさきあれば、木す
ゑをなみのこゆるに、て、しほ屋の
けふり一むすひ、すゑはかすみに
きえにほひ、ゆめ路ににたるうたかた
の、なみのこしふねかすかにて、から
ろのをとのとをければ、花にな
くねのかりかね、われもみやこのこひ
しさに、こゑをくらへてなくはかり。
うき身なからも

「(三〇ウ)

「(三〇オ)

「(三一オ)

まきのとを、あけぬくれ
ぬとすきゆけは、

三とせになるは

ほともなし。

「(三二ウ)

(第一二四) 房崎の浦で海女を見る大織冠

かくて男女のなからへ、わりなきなか
のちぎりにや、わか君いてき給

ふ。いまはたかいにに事も、うち

とけたりしいろみえて、かまたり、

みこめたまひて、いまはなにをかつゝ

むへき。われこそみやこにかくれもな

き、大しよくはんとはわか事なり。心に

ふかきのそみのありて、このほとこれ

に有つるそ。しかるへくは、みづからか所望

を、かなへてたひてんや。

「(三二ウ)

〔注〕

(一オ) さはんやかん…未詳。

(二ウ) 大たうれん…後出「けんみやうれん」ととも

に、阿修羅王が鬼に与えたという剣と鉾。

(一ウ) 百よ人…上巻に「兵を三百人あひ添へ」とあつ

たことによれば、「三百余人」とあるべき。なお、

(八ウ) には「三百よ人」とある。

(一ウ) はしふね…大船に積み、荷物の積み卸しや陸

との連絡用に使う小舟。

(二オ) しようてうし…「て」は衍字。「しようてうし」

で、雅楽の「序拍子」の転か。

(二ウ) つるに…「る」は「か」の誤写。「つかに」。

(四オ) くさり…骨の関節。

(四オ) りきしゆ…未詳。

(七オ) うしあしゆら…「うし」は敬称。大将の摩醯

首羅をいう。

(七オ) めたれかほ…卑怯な振る舞いをするときの顔

つき。

(七オ) すくやかし…したたか。

(七才) おもてかほくせ…表情にあらわれる眉をあげたり口をゆがめたりする癖。

(七才) めにすみたて…怒った目つきで鋭く見て。

(七ウ) ほついで…「ほこついで」の誤写。

(八才) からこんらあしゆら…「からけんだあしゆら 法羅騫駄阿修羅の転か。

(八才) さうかいふとりうかいふ…未詳。

(八ウ) ふきやうのむち…未詳。

(八ウ) こたれかゝつて…「勢いが弱くなりかかつて」の意。

(一〇ウ) かしらなし…以下「もめい島」まで島名未詳。

(一一才) ゆきのもとなり…未詳。

(一二ウ) なにとたるませたまふとも…「どのようになだまそうとなさつても」の意。

(一三才) あこかれて…「気が気でなく」の意。

(一三才) いつきの姫…「大切に育てられた姫」の意。

(一三ウ) やさう…未詳。

(一四才) うちむつけたる…「弱々しげな」の意。

(一五ウ) ぐす…「五ぐすい」の誤写。

(一八ウ) 二ねんをつかぬ…「二念を問題にしない」の意。

(二〇才) しちたたいし…釈迦の出家前の名。

(二〇ウ) やしゆたらによ…釈迦の出家前の王妃。

(二〇ウ) わしみ山…「驚わしのみ山」の誤写。靈鷲山。

(二二ウ) はうの…「方十はうの」の誤写。

(二二ウ) きたるもせず…「きたりもせず」の誤写。

(二三才) 身はいたつらになさるゝとかなふまし…「たとえ自分の身は殺されるとしても、許すこととはできない」の意。

(二四才) ちちゑ…「ち」は衍字。「智恵ちちゑ」。

(二八ウ) おさへ…「神おさへ」の誤写。

(二九ウ) しんそくにをみておや…「神足通によるなら行けないことはない」の意。「しんそく」は「神足通」の略で、どこへでも行ける超能力。

(二九ウ) たいせたいし…釈迦が菩薩行を修していた時の呼び名。

〔校異〕

- (一オ) しやうそくには―しやうそくに (卷子本) (寛永版)
(二ウ) 大かたなを―大かたな (卷子本) (寛永版)
(二ウ) 百よ人―三百よ人 (卷子本)・百三人 (寛永版)
(二オ) しよつてうし―しよつてう (卷子本)・しよつてうし (寛永版)
(二ウ) かうへをつるに―かうへをつかに (卷子本) (寛永版)
(二ウ) はなす事は―はなす事 (卷子本) (寛永版)
(二ウ) あらはれんとおもふとき―あらはれんと思ふ (卷子本)
(三オ) いさめとも―いさめと (卷子本) (寛永版)
(三ウ) りやうかいの―りやうかい (卷子本) (寛永版)
(三ウ) めいはとも―名馬共の (卷子本)
(四オ) うはしき―上敷に (卷子本) (寛永版)
(七オ) いひける―いふやう (卷子本)

(七オ) かうみやうふかく―かうみやうふかくか (卷子本) (寛永版)

(七ウ) ほついで―ほこつめて (卷子本) (寛永版)

(八オ) まん子をは―万子を (卷子本) (寛永版)

(八オ) りうかいふ―りうはいふ (卷子本) (寛永版)

(八ウ) まけいしゆら―まいしゆら (卷子本)

(九オ) てうづとして―手水とし (卷子本) (寛永版)

(一〇ウ) ほをあけて―ほをあけ (卷子本) (寛永版)

(一オ) ゆきのもととなり―ゆきのもとほり (卷子本) (寛永版)

(一ウ) 申ける―申 (卷子本) (寛永版)

(二一ウ) 御手にすかりて―御てにすかり (卷子本) (寛永版)

(二二ウ) なさけは―なけは (卷子本)

(二三ウ) 今こそおもひしられたり―今こそ思ひしら

(二四オ) りうくうのわさ―竜王のわさ (卷子本) (寛永版)

(二五ウ) ごす八く―五すい八く (卷子本) (寛永版)

（二六ウ）ほとけをねんする―仏をねかはんする（巻子本）（寛永版）

（二八オ）ほとけにならず―仏にえならず（巻子本）

（寛永版）

（二八ウ）ねはんにも―ねはん（巻子本）（寛永版）

（二八ウ）みんやうふたつに―みんやうふたつ（巻子本）

（寛永版）

（二〇ウ）ふかゝりし―ふかゝりき（巻子本）（寛永版）

（寛永版）

（二〇ウ）よそにみて―よそに見（巻子本）（寛永版）

（二〇ウ）わしみ山―わしのみやま（巻子本）（寛永版）

（寛永版）

（二〇ウ）なんたの―なんたは（巻子本）（寛永版）

（二一オ）しやかとほとけとなりたまひ―釈迦と成たまひ（巻子本）（寛永版）

（寛永版）

（二一ウ）はうへんを―はうへん（巻子本）（寛永版）

（二一ウ）しやうとちこくを―浄土地獄の（巻子本）

（寛永版）

（二一ウ）たてまつりて―たてまつり（巻子本）（寛永版）

（寛永版）

（二二ウ）くそくしてはうの―くそくし十方の（寛永版）

（寛永版）

（二二ウ）たへせすまします―たへせぬまします（巻子本）

（寛永版）

（二四オ）いかにや―いかにやいかに（巻子本）

（寛永版）

（二四ウ）うさもつらさものちの―うさもものちの（巻子本）

（寛永版）

（二五オ）おきあかりて―おきて（巻子本）（寛永版）

（二五ウ）おほせ―仰せに（巻子本）・おほせに（寛永版）

（寛永版）

（二六オ）ふつと―ふつと（巻子本）（寛永版）

（二六オ）いし―石の（巻子本）（寛永版）

（二八ウ）あまりに―あまり（巻子本）（寛永版）

（二八ウ）おさへをして―おさへをし出して（巻子本）

（寛永版）

（二九ウ）たいせたいし―さいせ太子（巻子本）

（三〇オ）大くはんとしては―大くわんとしは（巻子本）

本)

(三〇オ) おひたゝしーおひたゝしく (卷子本)

(三二ウ) いろみえてー色みえたり (卷子本)・いろ見

えたり (寛永版)

【編著者略歴】

伊藤 善隆（いとう よしたか）

昭和44年（1969）東京都生まれ。

早稲田大学大学院文学研究科日本文学専攻博士課程退学。
早稲田大学文学部助手、湘北短期大学教授等を経て、現在、
立正大学文学部文学科日本語日本文学専攻コース准教授、
博士（文学）。

著書：『初期林家林門の文学』（古典ライブラリー、2020）
など。

シリーズ・アタラクシア vol.5

立正大学古書資料館蔵 奈良絵本『大織冠』中巻
—影印と翻刻—

令和 3 年 1 月 25 日初版発行

編 著 者 伊藤 善隆
編 集 立正大学品川図書館
発 行 立正大学図書館
〒141-8602 東京都品川区大崎 4-2-16
電話 03-3492-6615
<https://www.ris.ac.jp/library/>

印刷・製本 株式会社イーフォー
〒141-0031 東京都品川区西五反田 8-7-11
電話 03-3779-1140



発刊の辞

戦後まもない一九四九年、
立正大学図書館年報「アタラクシア」創刊号が
発刊された。

戦禍を潜り残された貴重な資料を手に、
知の泉たらんとする大学の志は、
図書館の場からも発せられた。
書庫の奥に何時もあり、

ページを開けばいつでも触れられる、
「アタラクシア」にある先人の言葉の息吹が、
今、溢れる情報のなかで輝いて感じられる。
図書館の蔵書は折にふれ寄贈され、購入し、
多くの人に支えられて今に至っている。
めまぐるしく変化する時代に流されず、
多様化するメディアに対応し、

立正大学図書館の資料から掘えてくる
普遍的価値を伝えるために、
「シリーズ・アタラクシア」をここに発刊する。

二〇一三年 三月吉日 立正大学図書館

立正大學圖書館

